濟生

SAISEI

THE NEWSLETTER of
Social Welfare Organization
Saiseikai Imperial Gift Foundation, Inc.

No.1143

「NEWSな済生人」
チーム医療で
患者さんの足を守る！

9
September 2024
社会福祉法人 恩賜財団 済生会
https://www.saiseikai.or.jp

済生会の不易流行論

192

理事長 **炭谷 茂**
Shigeru Sumitani

女性が輝く職場

パリオリンピックでは日本選手の大活躍で終わったが、私のオリンピックの記憶は、1952年のヘルシンキオリンピックから始まる。戦後、日本が初めて参加した大会だったが、日本選手は、レスリングで金メダルを獲得するなど活躍した。私と同世代以上は、フィンランドと言えばヘルシンキ大会を連想するほど、日本中を熱狂させた。

2015年8月、ソーシャルファーム（社会的事業所）の調査のためフィンランドを訪れた。森と湖の国といわれるように環境を大切にする美しい国である。オリンピック会場となった体育館は、70年経過しても大切に使われていた。

人間を大切にするのもフィンランドの特徴である。女性の社会進出が進んでいるのもこのためである。訪問先の障害者等の就労施設の代表は、半数が女性だった。どこの職場も明るく活気を帯びていた。

面談した女性の代表者は、50歳前後だったが、「年末に退職し、大学院で心理学を学ぶ」と希望に満ちた表情で話してくれた。フィンランドではこの女性のようなケースは、珍しくない。常にキャリアアップを目指して研鑽（けんさん）に努める。

今年6月に世界経済フォーラムが発表した2024年版ジェンダーギャップ指数では、フィンランドは、世界2位で男女の格差は小さい。国会議員の半数近くが女性、前首相は30代の女性だった。企業の取締役の3分1が女性である。これが同国の活力を高め、1人当たりGDPは、日本の1・6倍である。

☆　☆

日本の女性の社会進出は、発展途上である。ジェンダーギャップ指数は、世界118位とフィンランドに大きく離されている。

医療や福祉の職場は、女性が主力である。済生会では女性が常勤職員の70％を超える。女性がどれだけ元気に働くかによって病院や福祉施設のサービス水準が決まると言っても過言ではない。

私は、旧厚生省国立病院部長の時に「国立看護大学校」の新設に乗り出した。国立病院の政策医療を推進するためには、高度な知識や技能を持つ看護師の養成が必須だと考えたからだ。ところが幹部を交えた最初の検討会議で極めて地位の高い人物は、「ワシの長い臨床経験では、〈看護婦〉は、医師の指示に従えばよいのであって学問は不要でむしろ害になる。看護大学校には反対だ」と一歩も引かない剣幕だ。同席した看護師たちは、下を向いて目を潤ませた。

ボクは、反論にも値しないと聞き流し、難関だった大蔵省、文部省（いずれも当時）等との折衝を進め、国立看護大学校の設立に漕ぎつけた。現在では期待したとおり卒業生が活躍をしているのを見るとうれしい。

これは28年前の話である。化石のような人物は、今では存在しないだろう。フィンランドのように女性がキャリアアップに努め、現場でもっと輝くようになれば、日本の医療や福祉の水準は、確実に向上していく。

不易流行（ふえきりゅうこう）：不易は永遠性、流行はその時々の新風をいい、芭蕉が俳諧思想を表現するときに用いた。
済生会は長い歴史で醸成された価値を大切にして、時代の変化に適応していかなければならない。

HITACHI
Inspire the Next

人事給与システムが変われば、どうなる。

福祉の森
財務会計システム

GrowOne 人事SX
GrowOne 給与SX

日立システムズはニッセイコム社製人事給与システムをご提案致します。

GrowOne 人事SX
GrowOne 給与SX

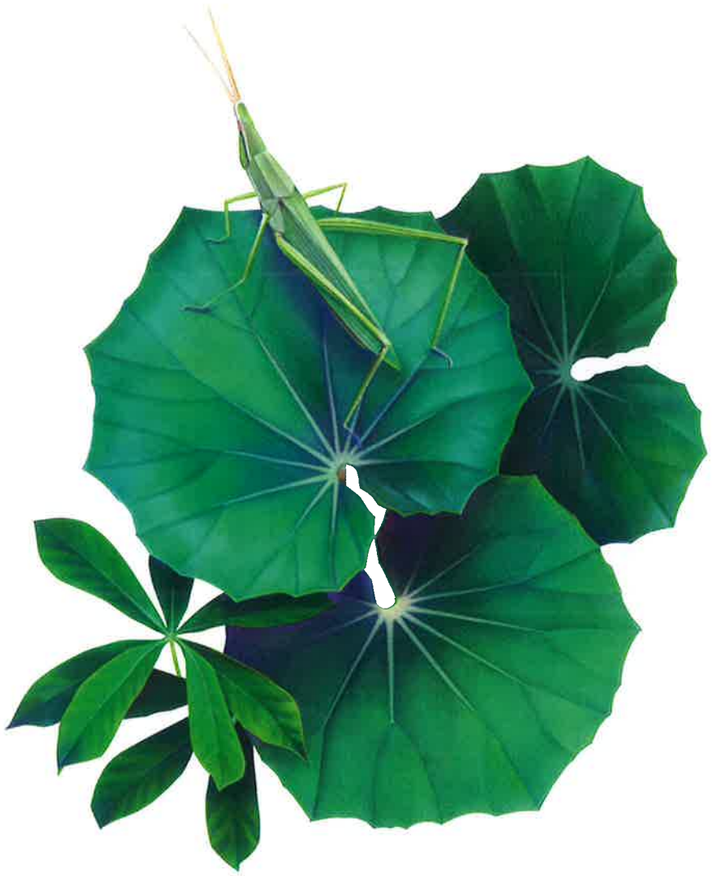
特長1 給与計算時のexcel管理を削減！
各種手当や退職金の計算をシステム内で完結することで、給与計算にかかる時間数や計算ミスのリスクを削減できます。

特長2 人事情報からの自動計算！
家族情報から扶養手当や年末調整を自動計算し、介護保険等の年齢による控除や手当も自動化できます。

特長3 様々な支給形態に対応！
正職員、非常勤職員や日給・時給など様々な雇用契約に応じた支給形態に対応し、職員情報から自動判定できます。

株式会社 日立システムズ
〒141-0032　東京都品川区大崎1-11-1　ゲートシティー大崎ウエストタワー
福祉の森担当：山本
フリーダイヤル：0120-055-294

Human＊IT



済生

SAISEI

CONTENTS

SEPTEMBER, 2024

NEWSな済生人
チーム医療で患者さんの足を守る！
和歌山病院
院長 川上 守さん ＋ 統括副院長 英 肇さん 06

済生会交差点
《日本で働く！ 看護補助者》心の通うコミュニケーションで、患者さん・入所者さんを元気に／《不正薬物の密輸入阻止》医療の力で市民の安全を守れ！ 嚥下密輸入発生時に備えて訓練／《世界に飛躍する済生会医師》低侵襲がん治療と副作用サポート。医師2人が国際学会で受賞 12

連載 **機関誌「済生」が創刊100年！** 18

巻頭コラム 済生会の不易流行論
女性が輝く職場 理事長 炭谷 茂 03

9月のたよりが聞こえる ショウリョウバッタ
表紙のことば 久保田眞由美 05

第22回全国済生会在宅サービス協議会 20

ソーシャルインクルージョン 22

この人 吉岡更紗 26

口福にっぽん 吉井省一 28

だれでもかんたん てづくりおもちゃ いまいみさ 30

TOPICS 32

載々、大雑報 83

題字協力：石飛博光
アートディレクション：OVO INTERNATIONAL

9月のたよりが聞こえる　ショウリョウバッタ

夏の昆虫採集、一番のお目当てはカブトムシやクワガタ。しかし日中に夜行性の彼らを捕まえるのは困難。そんな時、頼りになるのがバッタ。中でも触覚の先端から後ろ足の先までの全長が20センチ近くにもなるショウリョウバッタのメスの成虫を見つけると心が躍った。後ろの両足をつかむと体を上下に振る奇妙な動きをする。かわいそうだけれどこれで楽しんだ人はきっといるはず……。

一方のオス。体長はメスの半分ほど。大容量なメスに比べて細身で正真正銘の〝少量バッタ〟。「チキチキチキ」と音を立てて飛ぶ。夏を感じる懐かしい音だ。

青い空に太陽と入道雲の下、麦わら帽子に虫取り網と虫かごを持つ子どもたち。こうイメージする日本の夏は過去の話。今どきは冷房が効いた部屋の中、友達とオンラインでゲーム「あつまれ どうぶつの森」の虫取り大会で、金のムシトロフィー獲得を目指すのが常識なのかもしれない。

日本気象協会によると昨年6～8月の全国平均気温は1898年の統計開始以来最も高くなった。しかし今年の夏も暑かった。「命に関わる危険な暑さ」と報道されると外遊びはなかなかできない。虫たちは酷暑をどう乗り切ったのだろうか。どこか風情がある夕立とは違い、時間に関係なく突如として起こるゲリラ雷雨と洪水。虫にとっても「命に関わる危険な暑さ」はすでに日常になりつつある。

昨年、生誕200年を迎えたフランスのジャン・アンリ・ファーブル。有名な「昆虫記」の第一巻を書き上げたのは55歳のとき。昆虫に対するあふれるほどの好奇心と探求心を持つ博物学者は91歳で亡くなるまでアルマス（荒れ地）と名付けた自宅兼研究所の庭で虫たちと向き合った。

自分の死後約100年後の世界。虫たちとゆっくり会話できない世の中になると思っただろうか。（K）

表紙のことば
子どものときにだけ訪れる不思議な出会い

表紙イラスト **久保田眞由美** *Mayumi Kubota*

生い繁る草むらの緑の濃淡の中に、何かの気配。じーっと目を凝らす。一度それに気付いてしまうとその存在ははっきり見える。また、突然に草が動きバッタに気が付く。追いかけると逃げられる。幼い頃、弟と虫捕りをしていたとき遊んでくれた忍者のようなショウリョウバッタです。大人になってからは見かけなくなりました。もしも見つけたら、懐かしい友達に会ったような気持ちになるでしょうか。

チーム医療で患者さんの足を守る！

和歌山病院
院長
川上 守 さん

和歌山で初の「下肢総合診療センター」開設から1年

統括副院長
英 肇 さん

NEWSな済生人 Interview

和歌山病院は昨年10月に下肢総合診療センターを開設、今年2月に県内で唯一、日本フットケア・足病医学会の認定を受けました。糖尿病や動脈硬化などに伴う足の疾患に悩む患者さんや疾病リスクのある市民に対して、医師、看護師、理学療法士、臨床検査技師、管理栄養士など多職種が連携して予防や治療、リハビリ、再発防止に取り組んでいます。各診療科が横断的に連携するチーム医療について話を聞きました。

（岡山・吉備病院
済生記者　難波美紀）

難波　和歌山病院のホームページで病院の歩みを調べました。歴史がある病院ですね。

川上　1913（大正2）年に和歌山市診療所として開設、今年で112年目です。

難波　本誌4月号「和歌山病院済生会フェア」の記事では救急や災害医療にも力を入れているとありました。

川上　2022年の救急車の受け入れは2384件。医師1人あたり88件という実績は県内の他施設を大きく上回っており、この年救急医療功労者として県知事から表彰されました。

難波　地域から信頼されているということが分かります。

川上　私が当院の院長に就任したのは2020年4月です。当院に来る前の13年間、県立医科大学附属病院紀北分院の脊椎ケアセンターで脊椎疾患を抱える患者さんのケアを中心とした診療に携わっていました。従来の脊椎疾患を有する患者さんの3割は治癒が難しいと言われていましたので脊椎ケアチームで患者さんを診断・評価、治療にあたるようにしました。

難波　患者さんに変化はありましたか。

川上　痛みなどを訴えていた患者さんはセラピストや臨床心理士による懸命のケアで徐々に症状が回復し、療養生活に前向きになっていきました。患者さん中心の医療を実現し継続していくには、すべての職員がシームレスに連携するチーム医療が必要不可欠だと実感しました。実際、患者さんの本音を多職種で共有することもあります。

難波　そうした経験もあり、和歌山病院でもチーム医療に力を入れていこうと。

川上　はい。急性期病院は診療科ごとの〝縦割り〟の診療体制が定着することがあります。患者中心の医療を目指すには組織を見直す必要があると思いました。

難波　例えばどういった点でしょうか。

川上　高齢者施設から骨折で救急搬送されてきた患者さんが入院中に認知症が進行しても、けがが改善すれば退院となります。私は急性期の治療に加えて、認知機能、栄養面まで回復させていきたいと考えていま

※写真撮影時のみマスクを外しています

地域との交流の場「済生会フェア」

いざという時のために、マネキンを使った心肺蘇生を訓練

車椅子や松葉杖を体験し、介助の大切さを学んでもらう

医療講演で足のトラブルを解説した下肢総合診療センタースタッフ

模擬手術体験を通し、将来の医療人材育成に取り組む

す。そのために、さまざまな診療科が横断的に連携するチーム医療が不可欠です。

難波　そうして結実したのが下肢総合診療センターなのですね。

川上　日本には米国などのように足病学の教育や専門医制度がなく、「足病科」を標榜する医療機関もありません。そのため、疾患によって整形外科、血管外科、循環器内科、皮膚科などで治療が行なわれます。特に重症の下肢虚血、糖尿病壊疽に対しては、血行再建と創傷治療が不可欠です。

難波　一つの診療科だけでは対応できないのですね。

川上　当院では以前から関連する診療科が連携して治療にあたり、良好な治療成績をあげてきました。そのシステムをさらに強化するためにセンター化しました。

難波　総合的にサポートしてもらえるなら患者さんも安心です。

川上　こうした実績が評価され、「連携によって足病・下肢救済診療を積極的に行なっている施設（グループ）」として日本フットケア・足病医学会の認定施設に選ばれました。

さまざまな診療科が横断的に連携

難波　センターはどのような診療科、職種で組織されていますか。

英　血管外科（診断・血行再建）、糖尿病・代謝内科（全身管理・血糖コントロール）、循環器内科（心機能・冠動脈循環評価）、整形外科（切断、壊死した組織の除去）、皮膚科（創処置・植皮）、リハビリテーション科（リハビリ、義肢・装具作成）、腎センター（透析・吸着型血液浄化）などの診療科が横断的に連携しています。

難波　診療科それぞれが役割を持って連携しているのですね。

英　各科では医師のほか、フットケアナース、血管診療技師、管理栄養士、理学療法士などさまざまな職種が関わっています。

血行再建は血管外科、糖尿病治療は糖尿病専門医、足の装具は理学療法士が詳しい。検査は臨床検査技師、足のケアや患者さんの生活状況は看護師が多くの情報を持っています。各職種の専門知識を持ち寄り、患者さんを中心にして、理想的な治療を提供できるのがチーム医療の最大のメリットといえます。

難波　「足病」は聞き慣れない病名です。

英　立ったり歩いたりするときに障害となる非健康的な足の病気で、十分に管理されていない状態を言います。糖尿病、高血圧や高脂血症などの動脈硬化による血流障害からくる病気で、重症な場合は、皮膚潰瘍、足壊疽ですが、関節の変形、胼胝（たこ）、鶏眼（うおのめ）なども含まれます。

難波　近年、足病が増加しているのはなぜですか。

英　高齢化、生活習慣病の増加が背景にあり、特に高齢の糖尿病患者さんや動脈硬化の進んだ患者さんの増加に伴い合併症の一つである腎症による透析患者が増えています。そのベースにある動脈硬化性疾患が複雑化していることが大きな危険因子となっています。国内で血行再建を行なった足病の約4割が透析患者とされています。

難波　4割も！

英　私は糖尿病の専門医で、近年、糖尿病の合併症として細小血管障害（網膜症、腎障害、神経障害）だけでなく、大血管障害（心筋梗塞、脳梗塞、足病変）に注目しています。大血管障害のうち心筋梗塞と脳梗塞に関しては治療が進歩しており、診療体制も確立しています。一方、足病は加齢に伴って発症しやすくなりますが、一般の関心は高くありません。

難波　足のトラブルは何科を受診すればいいのか分からないという人は多いのでは。

英　足に小さな傷や皮膚の変色があっても深刻に考えず、神経障害で痛みも自覚することなく放置した結果、壊疽で足の切断を余儀なくされるケースが少なくありません。

難波「足病」の認知度をもっと上げる必要がありますね。

英　2月25日に当院初の済生会フェアを開催した際に、足病と同センターの診療を紹介しました。

急性期医療から介護まで一つの施設で患者中心の医療を

難波　患者さんはどういうきっかけでセンターを受診するのですか。

英　皮膚科や整形外科のクリニックなどから「患者さんの傷がなかなか治らない」ということで血流の検査を依頼されたり、筋骨格系の異常が見られないことから血流障害を疑って紹介されてきたりします。ご高齢の糖尿病の患者さんや透析患者さんが多く、足に傷や感染がある場合は早めの入院を勧めています。

難波　足病の治療はどのような方針で行なわれますか。

英　足病の背景には血糖コントロール不良、感染、低栄養、ADL低下、心機能低下などがあり、これらは患者さんの生活習慣と密接に関連しています。このような危険因子を踏まえ、多角的な視点から介入する必要があります。

聞き手の難波さん

難波　治療の目標は。

英　足病の発症、重症化を防ぎ、100歳までしっかり歩いてもらうことが目標です。高齢になって運動量が減り、ADLが低下すると、意欲や判断力が落ちて認知症を発症しやすくなります。足の血流を保ってしっかり歩くことで、認知症を防いで健康寿命を伸ばすことが重要です。「足」はその重要な鍵となります。

難波　下肢総合診療センターの将来の展望を教えてください。

ColumnS

診療科の垣根を越えて 多職種が連携 それぞれの専門知識を持ち寄り治療

川上　一つの施設で急性期医療から介護まで提供できるような仕組みができればいいですね。患者さん、家族、さらに企業も協力して、その施設の周囲に住民が暮らすような地域構想を描いています。

【取材を終えて】

タクシーの運転手が「済生会にはいつも助けてもらってるよ」と話していたことを今でも覚えています。同じ済生会職員としてうれしくなりました。足病に悩む患者さんにチームで向き合いそれぞれが専門性を生かし最善の治療する――。患者さんに寄り添い患者さんの日常を支える医療の大切さを改めて感じた取材でした。（難波美紀）

血管外科　医師
中西靖佳さん

足は“第2の心臓”危険因子を取り除くことが大切

動脈硬化による血流障害が足病の背景になっている場合は血行再建が必要です。主な治療法にはカテーテル治療、バイパス手術などがあります。切断など大がかりな手術は整形外科で行なわれますが、細い血管などが複雑に走行する足趾（そくし）の切断については血管外科で血流の状況を細かく調べながら行なうこともあります。

心臓から送り出された血液は下肢の筋肉の収縮により心臓に還流することから、足（脚）は第2の心臓ともいわれています。足病に至る不健康な生活習慣、足病による歩行障害は命に関わるリスクとなります。難治性の傷は再発しやすいので、生活習慣を改善し、危険因子を取り除くことが大切です。

臨床検査科技師長
久保光史さん

同副技師長
樋上やよいさん

現場での患者さんの声も共有し治療に生かす

足病に対して、通常は血管外科の医師によるトリアージで動脈または静脈の検査を実施します。動脈系の主な検査には血管の詰まり具合と血管の硬さを調べるABI検査、超音波エコー検査などがあります。必要に応じて造影CTで精密検査も行ないます。

多職種間での情報共有は、基本的には電子カルテとカンファレンスにより行なっていますが、患者さんが医師の前では言えなかった本音も他の職種には言えることがあります。話の内容に応じて医師や他の職種と共有しています。

患者さんが治療内容や治療方針に納得していない場合や、検査・ケアの目的や内容を理解していない場合は、二次的な問題が発生する可能性があるためすぐに患者情報を共有します。また、栄養サポートチーム（NST）、糖尿病ケアチームなどとの情報共有も必要になることがあります。

ケアする機会を増やして 患者さんの足を細かく観察

腎センター　看護師長
武田治子さん

フットケア外来では看護師が患者さんの足を30分以上かけて傷、巻き爪、冷感など細かく観察します。高齢の患者さんは足がきちんと洗えていないケースが多く、洗浄、バブル浴で清潔にします。胼胝や鶏眼は医師の指導を受けて看護師ができる範囲で削るなどの処置をします。

患者さん自身での日常のフットケアはとても重要です。高齢者の場合は同居する家族へ指導することもあります。

足病のリスクがある透析患者さんには週3回の透析外来の際に足を観察しています。患者さんが他科を受診した際にフットケア外来に寄ってもらったりして、できるだけケアする機会をつくるようにしています。

私たちは患者さんのできていないことに目を向けて指導しがちですが、逆に患者さんのできていることを評価する意識も必要だと思います。

リハビリ開始は手術の翌日から

リハビリテーション科
主任理学療法士
井村泰恵さん

主治医の処方箋に従ってリハビリを行ないます。靴に装着するインソールなどで除圧すれば歩行できる患者さんには患部の当たる部分をくり抜いて使ってもらいます。足趾を切断した患者さんは、傷が治るまで患部に体重をかけないようにかかとに重心をかける歩き方を指導したり、必要に応じてインソールや免荷装具の処方を主治医に提案したりします。

足趾の切断後、術創の回復には時間がかかりますが、糖尿病があると抜糸自体も術後10日以上かかることもあります。患側は安静が重要ですが、健側の筋力の衰えを防ぐために手術の翌日からリハビリは始まります。退院後の生活のために作業療法士によるトイレへの移動・移乗や、言語聴覚士による嚥下のリハビリも行ないます。

退院後の食事指導も大切

栄養管理科
主任
谷山優佳さん

糖尿病食、心臓動脈硬化食、透析食など疾患ごとにエネルギーと栄養素を考慮して献立を考えています。しかし、患者さんは自宅で普段食べている食事とは味付けも見た目も違っているからか、食事摂取量が減り低栄養状態になるケースもあります。そうした場合は患者さんや病棟看護師と相談して、食事内容の変更などを主治医に提案します。

退院後の食事指導では同居する家族のサポートがある人と、独居の人とでは指導も異なるため、患者さんから細かく話を聞いて個別対応します。

済生会 交差点

SAISEIKAI・JUNCTION

まわりのみんなを笑顔に 将来は指導的役割も期待

有馬正恵看護師長より

ウィディヤさんの魅力はコミュニケーション力。患者さんや入所者さんから言葉を引き出すのは日本人より上手かもしれません。ウィディヤさんの明るく、人の気持ちに寄り添う性格により、本心を伝える方は少なくないようです。

日本の病院で働く外国人は今後も増えてくるでしょう。ウィディヤさんには将来、リーダーとして指導的役割を果たしてもらえたらと思います。

ウィディヤさん手作りのカレー。この話は済生8月号・大雑報をご覧ください

日常生活支援も本人の状態を確認し丁寧に行なう

持ち前の明るさで済生会のソフトボール大会にも出場する

桜島出身の深道克芳さん（89歳）は2021年2月に鹿児島病院に入院、22年12月から併設の介護医療院で療養生活を送っています。入所当初は膝の痛みが強く歩くことができませんでしたが、1年8カ月にわたるリハビリで念願だった歩行器歩行ができるようになりました。

取材にお邪魔した日、透析を終え車椅子でスタッフルームに姿を見せた深道さんは、ウィディヤさんを見つけてうれしそうな顔に。ウィディヤさんについては「知らない国に来て大変だったでしょうが、一つずつ乗り越えてきたのでしょう。立派な人がいるものだと感嘆しました。この子についてはね、うん、何も言うことはないです」と信頼を寄せています。深道さんの言葉に「そんなこと言われると泣いちゃうでしょ」とウィディヤさんはうつむいて目頭を押さえました。

深道さんは鹿児島市役所に50年間勤め、市政を支えました。また、叙勲を受け昭和天皇に拝謁したことは生涯の誇りといいます。「人を大事にする心を持って仕事をしてきました。家内がいたからここまでこられました」と深道さん。10年前に亡くなった妻への感謝の気持ちと思い出があふれ、涙を浮かべていました。

「100歳まで頑張って一日一日を大事にしましょうね。一緒に楽しい思い出を作っていきましょうね」と寄り添うウィディヤさんにうなずく深道さんの優しい眼差しが印象的でした。

Column

一日一日を大事に、一緒に楽しい思い出を

心の通うコミュニケーションで 患者さん・入所者さんを元気に

日本で働く！看護補助者

鹿児島病院

20年前にインドネシアから日本に移住し、7年前から鹿児島病院で看護補助者として働くウィディヤさん。担当する業務や日本での暮らし、今後の目標を聞きました。

（本部広報課 河内淳史・大嶋 薫 メディカル・リーフ 宇佐美拓憲）

〈質問事項〉

❶現在担当する業務

❷日本で看護補助者として働くことを決めたきっかけ

❸日本での暮らし

❹今後の目標

❶鹿児島病院の療養病棟と介護医療院に所属し、患者さん・入所者さんの入浴、更衣、移動介助などが主な業務です。これらと同じぐらい大切な仕事が、皆さんの話し相手になることです。長期間入院・入所している人と話す機会も減ってきます。言葉数が少なくなっていた患者さんの誕生日に「ハッピーバースデー」を歌い、患者さんも喜んで一緒に歌ってくれたことがありました。患者さん・入所者さんの気持ちに寄り添うようにしています。

❷インドネシアの友人に誘われ一緒に来日。最初は精肉工場で働いていました。8年前、ハローワーク経由で済生会に採用され、鹿児島病院で清掃員として勤務をスタートしました。

看護や介護の仕事に興味があったため、資格がなくてもできる「看護補助者」のことを知り、自分に合っていると思いました。

❸勤務は8時半から17時まで。夜勤は月に6回と仕事中心の毎日です。日本語にも慣れてきて、インドネシアの仲間と母国語で話していても時々日本語が混じります。「へっが痛い（肩甲骨のあたりが凝る）」「よんごひんご（曲がっている状態）」など、患者さんや入所者さんとのやりとりで覚えた鹿児島の方言も自然と出てきます（笑）。

仕事で疲れたときは趣味の編み物などでリラックス。料理も好きで、インドネシア料理のほかカレーやパスタなどが得意です。

❹介護福祉士の資格を取ろうと、過去に出題された問題を使って勉強しています。今年は不合格でしたが、頑張って来年も受験します！ 独学で挑戦するのは大変ですが、看護師の資格を取ったインドネシア出身の仲間がいることが励みになっています。人生を楽しく過ごし、仕事も楽しくすれば、自分にかえってくると信じています。

ウィディヤ・ニンシさん

＊写真撮影時のみマスクを外しています

医療の力で市民の安全を守れ！
嚥下密輸入発生時に備えて訓練

不正薬物の密輸入阻止

〈鳥取〉境港総合病院
済生記者
亀尾美子

筆者

当院では5月21日に神戸税関境税関支署、鳥取県境港警察署と不正薬物密輸入事犯摘発時訓練を実施しました。

税関では日ごろから不正薬物や銃砲など、いわゆる社会悪物品の流入阻止に取り組んでいます。中でも不正薬物の密輸手口は近年巧妙化。航空機利用の旅客が不正薬物をラップやラテックス（天然ゴム）などで何重にも巻いて、飲み込む（嚥下する）ことで体内に隠匿する方法も散見されるといわれています。

嚥下による密輸入が疑われた場合、体内に異物が隠匿されているか、さらに、体外に排出された異物が違法薬物であるかを確認しなくてはいけません。そのためにはX線検査などの医療行為が必要ということで、米子空港から約5キロに位置する、最寄りの総合病院である当院に協力依頼がありました。

令和元年5月に最初の依頼があり、訓練実施に向けて準備を進めようとしていましたがコロナ禍で中止に。しかし、昨年から国内外の人の往来が再び活発化し、税関が押収した不正薬物の量は過去2番目の押収量を記録。国際線も就航している米子空港での嚥下密輸入事案発生を見据え、昨年12月に改めて合同訓練の協力依頼があり、5年越しで初実施に至りました。

訓練後にも合同で話し合いを行ない積極的な意見交換がなされた

税関・警察との訓練で役割分担を明確化

事前に税関・警察・当院の担当者が院内の動線を確認、訓練の流れのすり合わせなどをして、当日を迎えました。初めての訓練ということもあり、当院からは小田直治医局長や警察OBの川村俊夫保安指導員に加え、看護師、事務部員など計11人が参加。訓練は以下の流れを想定してシミュレーションを行ないました。

まず、空港内で税関が不正薬物飲み込みの疑いがある旅客に質問検査、手荷物検査等を行ない、疑いが濃厚となったとして病院へX線検査を依頼し、警察にも連絡。病院は受け入れ準備を開始します。対象者が搬送されてから退院まで常に警察や税関による警戒体制がとられます。到着後は問診、CT検査を行ない、異物が体内にあると診断されると入院となり、病院は看護体制、税関・警察は共同で監視体制をとります。

入院後は、排泄によって体外への異物の排出を促すために下剤の投薬や浣腸といった医療処置を実施。入院日数は、排泄状況によって異なります。すべての異物が排出したと思われるタイミングでもう一度CT検査を行ない、体内に異物がないことを確認した後に退院許可を出します。排泄物の鑑定が行なわれ、不正薬物と認められた場合は、退院後に警察が逮捕します。

【麻薬の摘発例】
ドイツから東京国際空港に到着した旅客が飲み込んで体内に隠匿されたコカイン約1.1キロを摘発。写真左は胃の周辺のX線画像（令和5年6月・東京税関）　出典：税関ホームページ（https://www.customs.go.jp/mizugiwa/mitsuyu/report2024/2024haku02.pdf）※赤枠は境港総合病院が追記

訓練を継続し関係を強固に状況に応じた対応を

今回の訓練は大きなトラブルもなく終了しました。訓練後の話し合いで、佐々木祐一郎病院長は、税関・警察に対して最大限の協力を約束すると同時に「患者さんや職員に危害が及ぶことが決してないように警備体制を整えてほしい」と話しました。そして、三者で再確認したのは今回の訓練があくまで「基本の形」であるということです。

対象者の人物像（性別、宗教など）、異物の量や内容により対応が変わってきます。例えば、対象者にアレルギーや宗教上の理由で食べられないものがあれば、食事内容を変更します。妊婦の場合はX線検査ができないので超音波検査など代替の検査方法を検討しなくてはいけません。また、ニュースなどでは体内で異物の包みが破れると対象者が薬物の過剰摂取で死亡するケースも報道されています。そのような場合は人命第一の処置が求められます。このようにあらゆる状況を想定し、三者で疑問点を共有、解決策を練る必要があります。

今回の訓練を機に税関や警察とも顔が見える関係づくりを継続し、いつ嚥下密輸入事案が発生しても対応できるように備えていきます。

低侵襲がん治療と副作用サポート 医師2人が国際学会で受賞

世界に飛躍する済生会医師

福井県済生会病院
済生記者
田中一弥

当院の放射線科主任部長・宮山士朗医師と内科部長兼集学的がん診療センター顧問・元雄良治医師が、それぞれの専門分野での功績により国際学会から表彰を受けました。当院はがん診療連携拠点病院として、集学的がん診療センターを中心に治療相談、がん教育、アピアランスケアなどの患者サポートを包括的に実施。「患者さんにやさしいがん治療」を掲げ、低侵襲で患者さんに負担の少ない治療を目指しています。当院のがん診療をけん引し、世界でもその貢献が認められた両医師の実績を紹介します。

アジア環太平洋IVR学会Gold Medalを持つ宮山医師(左)と、米国内科学会最高栄誉会員（MACP）の賞状を持つ元雄医師

筆者

IVRによる低侵襲治療を革新

宮山医師は1994年に当院に入職以来、専門とする腹部画像診断とIVR（画像化治療）の分野をリードしてきました。その技術的な卓越性と臨床への深い貢献が認められ、今年5月、タイ・バンコクで開催されたアジア環太平洋IVR学会（APSCVIR）で「Gold Medal」を獲得。日本人として9人目の受賞となりました。

IVRとはX線透視やCTなどの画像で身体の中を見ながらカテーテルや針を使って行なう治療法で、宮山医師はその中でも低侵襲がん治療が専門です。悪性の消化管がんや胆管閉塞に対し、まだ有効な治療法がなかった1991年当時から自作のカバー付き金属ステントを使用した治療を実施。患者さんの苦痛の軽減と生活の質向上に取り組んできました。その後1995年に市販のステントが登場し、現在はいずれの手技も標準治療として世界中に広く普及しています。

❹アメリカ・ボストンで行なわれた米国内科学会での元雄医師
❺アジア環太平洋IVR学会でGold Medalを受け取る宮山医師

また、肝細胞がんに対する肝動脈化学塞栓療法（TACE）の治療成績向上にも寄与。TACEとは肝細胞がんに栄養を送る動脈に薬剤を注入して血流を塞ぎ、がん細胞を壊死させる治療法です。宮山医師は専用の極細のカテーテルと血管撮影装置を用いたCT撮影技術と、そのデータを用いて腫瘍の栄養血管を自動解析する支援ソフトウェアの開発に取り組み、超選択的TACEの手技の確立とその普及に尽力してきました。

漢方を活用したがん治療サポート外来

元雄医師は2019年6月以来当院で「がん治療サポート外来」を担当してきました。口内炎、食欲不振、全身倦怠感、手足のしびれといった、がん治療による副作用を抱える患者さんに対し、医療用漢方製剤を用いて症状を和らげる「がん支持医療」を専門としています。

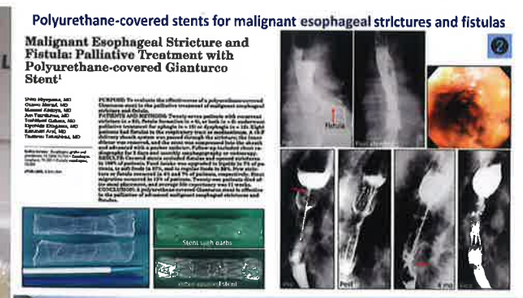
世界中で約16万人の会員を擁する米国内科学会（ACP）でその医学的な功績や社会貢献が認められ、2000年に「ACP上級会員（フェロー：FACP）」となっていましたが、さらに今年4月、特に卓越した業績を持つ者に授与される「ACP最高栄誉会員（マスター：MACP）」に選出。日本人として9人目の受賞者となりました。

元雄医師は2003年のACP日本支部の設立に尽力し、その発展に寄与。また、がん支持医療における漢方製剤の効果を筆頭著者として多くの英語論文で世界に発信するとともに、国内医学部での漢方医学教育や医学英語教育の推進にも貢献してきました。

「これからも世界への発信と国際交流を続け、内科医として患者さんやご家族から『今日病院に来てよかった』と思ってもらえるような診療を心がけたい」と元雄医師は語る

2023年9月、英国オックスフォード大学で漢方医学の講義を行なう元雄医師

国際学会での両医師の受賞について、笠原善郎院長は「このような栄誉ある賞を受賞したことを心から誇りに思います。彼らの努力と卓越した成果は、当院の医療の質の高さを世界に示すものです」と述べました。また、「これからもソーシャルインクルージョンを積極的に推進し、治療から退院、そして地域社会へのスムーズな復帰を支援することで、健康寿命の延伸を目指す取り組みを強化していきたい」と今後の抱負を語りました。■



❶肝動脈化学塞栓療法（TACE）の手技中の宮山医師。「これからも技術の革新を続け、後進の育成にも力を注いでいきたい」と語る
❷宮山医師自作のカバー付き金属ステントを使用した治療に関する資料
❸2023年12月、中国・南京市で開催された学会での宮山医師の発表

機関誌「済生」が創刊100年！

1924（大正13）年6月創刊の「済生」が発行100年を迎えました。「済生」のあゆみを紹介します。
「済生」創刊から12年後の1936年（昭和11）年。
軍国主義が強まる日本は多数の庶民が疾病、貧困に苦しんでいました。
翌年には日中戦争が開始。アジア・太平洋戦争に繋（つな）がる日本の「戦中」の幕開けといえる頃です。
そのような中で同年3月号に突如として連載が始まった謎の随筆「蛙のはらわた」を紹介します。

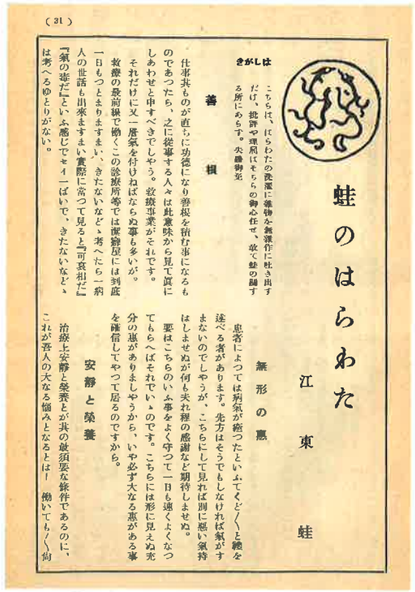
（株）白橋　西林芙美・本部広報課　河内淳史

「蛙のはらわた」――90年前の診療所日誌

この頃の「済生」は政策提言や、外国視察報告などが掲載され、識者の意見発表も活発でした。

ある日、当時の理事長・馬淵鋭太郎氏が編集部へ「もう少し柔らかみが欲しい」と提案。原稿募集に早速応えてくれたのが東京・本所診療所の長菅實医師だったようです。

随筆掲載のきっかけになった馬淵理事長


（21）

蛙のはらわた

江東蛙

無形の悪

患者によつては病気が出つたとい ふてどく〳〵と絶を述べる者があります。先方はそうでもしなければ気がすまないのでしやうが、こちらにして見れば別に悪い気持はしませぬが何も其程感謝など期待はまさぬ。

要はこちらのいふ事をよく守つて一日も速くよくなつてもらへばそれでいゝのです。こちらには形に見えぬ充分の悪がありましやうから、いや必ず大なる悪があると事を疑信してやつて居るのですから。

安静と滋養

治療と安静と滋養とが其の最須な條件であるのに、これが吾人の大なる悩みとなるとは！　働いても〳〵物

念がしは

こちらは、はらわたの改革に邪魔を無選作に杜さ出すだけ、批評や理屈にそちらの御心任で、敬く鈔の綴する所にあります。尖藤物史

善根

仕事共ものが直らに功徳になり善根を術行事になるものであつたら、之に従事する人々は此意味から見て眞に しあわせと申すべきでしやう。救療事業がそれです。

それだけに又一層気を付けねばならぬ事も多いが。

救療の最前線で働くこの診療所等は実に到底一日もつとまりますまい、きたない など、考へたら一病人の世話も出来ますまい。實際に常つて見ると可哀相で『氣の毒だとい ふ感じでキイ一ぱいで、きたないなどゝは考へるゆとりがない。

「済生」1936（昭和11）年3月号より

表れている記事をご紹介します。

―ぶんなぐり―

無闇に子どもに手を上げている母親を後日、諭したところ、落ち着いたようだった。しかし同様の事例は他にも多数存在し、診療には関係ないことだと放っておけない気がする。

―内職―

慢性的な症状がようやく改善してきた患者が荷札に針金を通す内職を始めたというが、病み上がりでは1日500枚しか仕上げられない。1000枚やっても2銭5厘。他にも玩具の車輪付けや石鹸（せっけん）の箱張りなどの内職がある。

内職と疾病の関係は医療に関連する大きな問題でもある。内職に関する詳しい調査を求む。

「江東蛙」こと長菅實医師が勤務していた東京・本所診療所（済生会五十年誌より）

連載と同じころに神奈川県川崎市で活動した済生会川崎診療所。毎週木曜日に巡回診療をしていた。沖縄県出身が多い中島地区（写真右上）や朝鮮人を主とする在日外国人が暮らす大島地区（写真左下）

「治療だけでなく生活全般に渡る問題解決をしなければならない」と意識しているのが分かります。

90年もの昔から済生会が医療社会事業の先駆けとなっていた一例と言えるでしょう。

蛙のはらわたの行方

1937（昭和12）年の日中戦争開始とともに「済生」誌上は戦争関連の記事が増加。不定期連載だった「蛙のはらわた」は第6回掲載後、特に終わりの言葉などもなく姿を消します。

そして1945（昭和20）年、東京大空襲で本所診療所は焼失。再建もされませんでした。その後の「済生」には本所診療所や長菅氏に関する言及は存在しません。

本所（現在の墨田区南部）周辺は東京大空襲で96％が焼失したといわれています（総務省Web）。また、当時空襲で全焼等の被害を受けた済生会施設は、日本全国で55カ所にも上りました（「済生」昭和21年12月号）。今回、随筆「蛙のはらわた」を調査し、90年もの昔から変わらない済生の志の温かさに触れ、感銘を受けました。同時に、それが過去に戦争で失われてしまった悲しさ、戦争被害の甚大さを改めて実感しました。

【本所診療所】 1912（大正元）年～1945（昭和20）年。深川診療所と同時期開設の済生会診療所第1号。困窮世帯が多い地域で無料低額診療を行っていたため患者が殺到。

関東大震災後に天幕診療所を設置するなど数回の変遷を経て、1927（昭和2年）、洋風木造2階建てに新築。

1945年3月9日に東京大空襲で焼失、再建せず。

次号は済生会と水上警察が連携した水上生活者への巡回診療船での活動を紹介します。

（63）

編輯後記

戒厳令下の帝都から「済生」三月號を携さり致します。

春優柳愛の側、校正刷を抱いて折から降りしゝる砂雪の中を市電で日比谷に来かゝります。丸の内一帯常緑樹の長士官が、ちに白雪を冠らした銀杏樹の中に点在つてゐる。何かあつたな！　瞬間頃の中から抜けたのが五・一五事件から相導中佐事件にかけた一連の青年將校の俄怪革新運動。

それから先は號外一つ出ない重態版の都に無気味なデマが流れんで、不得要領なラヂオが僅かに事件の重大性を暗示する。かり、廿六、廿七、廿八、廿九、一日と、一日と気が緊迫化を増し、事件の全貌も略判然しかつて或最今迫かれた帝都は重苦の底を知へ、後に廿八日の夜は戒厳令、続出日の偉事亜変要所々に見受られる祭典、遂に廿九日は戒厳軍隊の見做され一帯住民に立退命令の出る騒ぎでした。此日午後に亜つて倉皇荷扶し、我々も雨降る安堵の胸をなで下ろしたことでした。

おかげで、校正も後で了ひました。

北極鳴鏑主任が去る二月廿四日の夜から山形、秋田県巡に出張しましたので、私一人で帝都不安の間を抜けたり、大臣同みなしたり、交通遮断と殺戮兵士の間を抜けたり、それから理想主義からもう少し「済生」も柔かみを加へ付けたらどうかと云よ御注意があります。

なれらは陸海、感想と云つた居ります。

全国の本會診療所員諸氏及関係各位の御奮闘を切望致します。

○「蛙のはらわた」は本會東京市本所診療所長菅實先生の随筆です。

此筆者は実芝藤以下の人々に対する全人生を包含したアクトです。教療事業と云ふものは実芝藤以下の人々に対する全人生を包含したアクトです。教療事業と云ふものは実芝藤以下の人々の全面に惚れて行くのであるから、最後に在る自分を若選ばれて、暮い人生哲学や人生隙面がもちこんから発見みかけてゐるものです。そうした感想や哲学は踏められる丈丈めて本誌へ御投稿願ればゆ幸です。

（編谷生）

昭和十一年
昭和十一年三月廿五日印刷
昭和十一年三月廿八日発行
定価　一冊　一ヶ月　一ヶ年
廣告料
編輯兼発行人　東京市
印刷人　東京市小
印刷所　東京市本
「濟生」　濟生會
東京市内
賓療所

編集後記では「蛙のはらわた」の作者が明かされている（「済生」1936（昭和11）年3月号より）

第四號　第十四年
昭和十二年　濟生　四月號

「蛙のはらわた」が連載されていた当時の目次（「済生」1937（昭和12）年4月号より）

第22回全国済生会在宅サービス協議会報告

多職種協働によるトータルな在宅ケアの推進

会長（唐津医療福祉センター長）　園田孝志

全国済生会在宅サービス協議会が、7月13日に大阪市で開催されました。「医療・介護・福祉の多職種協働によるトータルな在宅ケアの推進」を全体テーマに、136事業所から203人が参加。三嶋理晃・大阪府済生会支部長の開会宣言を皮切りに総会がスタートしました。

今年は総会後の特別講演を行なわず、その分、五つある部会での討議時間を拡大し、それぞれの討議内容をシンポジウムで参加者全員と共有することにしました。

シンポジウムでは〈愛媛〉松山老健にぎたつ苑の山本昌也施設長が座長を務め、各部会長が登壇して部会での討議内容を報告。特に、地域連携に関する報告では、近年頻発している自然災害が身近で発生した際に、在宅サービスの提供者としてどのように対応すべきか等、危機管理の重要性を再確認しました。

次回は〈山口〉下関市豊浦地域ケアセンターの担当で、令和7年7月12日に下関市で開催予定です。

訪問看護ステーション部会

災害支援体制の確立を目指して

〈千葉〉済生会ならしの訪問看護ステーション　所長　加藤晴子

48施設から58人が参加し、災害時の連携について討議しました。

静岡済生会訪問看護ステーションおしかの山田芳枝さんは、静岡市の訪問看護ステーションの連携体制確立の実例と課題を報告。〈石川〉金沢訪問看護ステーションの河原美由紀さんは、能登半島地震の経験も踏まえ地域との連携の大切さや支援に来るスタッフのケアの重要性について話しました。

ディスカッションでは、ICT活用の課題や災害時に重要となる普段からの事業所間連携について話し合いました。その中で、災害時に済生会ができることについてはブロックごとの支援体制構築、スケールメリットを生かした施設間の人材・物資の支援への期待が挙げられました。

また、今回は〈大阪〉看護小規模多機能型居宅介護（看多機）事業なでしこ吹田の児浦博子さんが看多機について説明し、その有用性・将来性について理解を深めました。

地域包括・在宅介護支援センター部会

他部会とのつながりも視野に活動

〈東京〉港区立南麻布地域包括支援センター　社会福祉士　佐藤志穂子

ICTの活用と災害対応を含めた地域連携について討議を行ない、22施設から23人が参加しました。

ICT活用については、事業の運営により偏りがあること、便利である反面リスクが伴うため運用上のルールを決めることが必要であるなどの意見が出ました。「利用者支援」「関係各所への連絡」「会議や研修」と活用する場面を区別する必要性を共有しました。

災害対応を含む地域連携については、継続的な課題となっている法人内での情報共有の必要性を話し合いました。

今回は参加者が自施設で作成した地域包括支援センターの業務内容や相談窓口の案内などを掲載した機関紙を持参。全国各地にある事業所同士で情報交換ができました。

訪問介護事業所部会

協議内容を現場で生かせるように

〈埼玉〉済生会ケアステーションなでしこ　管理者　福田亜希

「ICTの活用」「地域連携とBCP」「運営（加算算定と人材不足）」をテーマに、9施設11人でグループミーティングを実施しました。

ICTの活用は各施設で徐々に進んでおり、職員間のコミュニケーションや家族への介護記録の残し方等の具体的な活用方法に加え、情報リスクへの対応などデメリットやインセキュリティーについても情報交換しました。

地域連携とBCPについては、地域差を踏まえた内容を検討。場面設定をする、地域と協働するなどの具体的な訓練方法が示されました。業務実施場所が職員ごとに異なるため集団での訓練は難しく、災害リスクも訪問先、移動中と常に変動する等、訪問介護特有の課題にも触れ、優先順位の設定やハイリスクな場所（場面）への準備の必要性を確認しました。

運営については特に人材不足が長期的な課題ですが、現状の取り組みや考え方を共有し、人材活用の理念や具体的な方法を検討しました。

居宅介護支援事業所部会

地域連携やICT活用がより重要に

〈愛媛〉今治指定居宅介護支援事業所さいせい　管理者　中村一人

33事業所から35人が参加し、全部会共通の各テーマについてグループに分かれて協議しました。

「ICT」のテーマでは、情報共有ツールとしてLINEWORKSやMCSなどを利用開始する中で、各ツールの選択や使い分け、個人情報の問題などの課題について話し合いました。

「地域連携」のテーマでは、ICT活用での課題と同様に個人情報の扱いについてや、近隣トラブルで介護支援専門員に矛先が向いてしまいシャドウワークをせざるを得なくなるといった問題も議題に上がりました。

「認知症」については、ICT活用や地域連携による対応が行なわれているなど他のテーマにも関連した情報交換が行なわれました。

今後、独居高齢者・生活困窮者・ターミナルケアなどへの対応が増え、地域との連携やICTを使った遠方の家族とのコミュニケーションがより重要になることを確認することができました。

通所介護・通所リハビリ部会

前向きな取り組みを共有し意見交換

〈滋賀〉栗東デイサービスセンター　主任　角田耕一郎

23施設から28人が参加し、主に「ICTの活用」と「地域連携」をテーマにディスカッションを行ないました。

ICTの活用については、介護ソフトを駆使した業務効率化、加算への対応など積極的に導入・活用している事業所がある一方で、費用対効果で導入に踏み切れない現状があることも共有。また、一概にICT化を進めるのではなく、サービス担当者会議や他事業所との関わりは直接対面で行なうのが望ましいという意見もありました。

地域連携については、行政主導でICTを活用し、利用者の情報を各事業所が共有できるシステムを構築した事例や、地域の介護予防に参加し広報活動を行なうといった各地域でのさまざまな取り組みを共有しました。

人材確保と安定した運営の双方が求められる中、各事業所の前向きな取り組みを共有し、意見交換を行なう有意義な場となりました。

済生会はソーシャルインクルージョン推進計画を実施しています。
無料低額診療もなでしこプランも、この中に含まれます。
だれも排除されないまちづくりを目指し、
全支部・施設が1600の事業を展開します。

〈東京〉中央病院

みんなとプロジェクト×戸板女子 新レシピ試食会

芝地域で採れるはちみつ「しばみつ®」を使用したお菓子のレシピを考案する、戸板女子短期大学とのコラボレーション企画第2弾の試食会を7月9日、同大学で開催しました。

当日は、学生5人が自身で考案したレシピをプレゼンした後、プロジェクトメンバー4人（当院職員2人、外部2人）が試作品のお菓子を試食しました。

学生たちが自信を持って発表した五つのお菓子はどれも魅力的。一つに絞るのは大変難しいのですが、今後プロジェクトで採用に向けて検討していきます。

採用されたレシピは、就労継続支援B型の作業所で製造し、地域の祭りなどのイベントの際に販売する予定です。

（済生記者　鈴木香純）

〈福岡〉二日市病院

筑紫野市とコラボ イオン筑紫野で健康福祉フェア

7月7日にイオンモール筑紫野で「健康福祉フェア」を開催し、245人が来場しました。当院は地域住民の健康意識の向上・啓発を目的に同会場で年3回のイベントを行なっています。

今年度1回目の今回のテーマは「健康診断」で、年1回の健康診断を推奨する筑紫野市と共同で講演会を企画。当院健診センター・松元真理部長ががん検診の重要性について、筑紫野市健康福祉部健康推進課の保健師が市で行なっている健診の種類と受け方について話しました。

その後、筑紫野市集団健診の予約会を実施しました。

他にも健康測定や健康相談、子ども向けの臨床検査技師のお仕事体験を行ないました。

参加者からは「自分の健康状態が分かってよかった」「次回もぜひ参加したい」などの感想がありました。

（経営戦略課　都甲七桜）

〈静岡〉特養小鹿なでしこ苑

インクルーシブ防災活動で「防災かまどベンチ」作りに挑戦

福祉と防災を融合させたインクルーシブ防災活動を展開する西豊田学区地域支え合い体制づくり実行委員会の一員として、このほど「防災かまどベンチ」の制作に携わりました。

これは、平時はベンチとして活用し、災害発生時は座面を外すことで「かまど」として使えるもの。7月6日は地区の小学校で、8月3日は地区の中学校で、防災かまどベンチの基礎づくりを行ないました。

まずは地域の参加者（10人ほど）と一緒に穴を掘り、メッシュ筋をセット。木枠を作り、砂・砂利・セメント・水を練り混ぜたコンクリートを流し込み、成形しました。

今後は「レンガ積み」「仕上げ」の工程を経て完成を目指します。12月に行なわれる地域の防災訓練では、この防災かまどを使用して炊き出しを行なう予定です。

（地域相談員　望月亜紀）

地域の子ども食堂へ衣類等を寄付

〈山形〉特養ながまち荘

8月5日、山形市泉町の子ども食堂「ひがし食堂ふれあい」に、子ども用衣類200点とハンカチや小物など段ボール1箱分を寄付しました。

当荘ソーシャルインクルージョン計画推進委員会は、年間を通して介護者教室や認知症サポーター養成講座など、地域貢献に軸をおいた活動を計画・実行しており、今回の活動もその一環です。これらの品物は6月25日から1カ月間、職員から募集したものです。

同日行なわれた贈呈式には、子ども食堂代表の鈴木和子さんが出席。岩崎勝也施設長から品物を受け取った鈴木さんは「衣類が届くのを楽しみにしている子どもたちがいるのでとてもうれしく思います」とコメントしました。

（済生記者　髙見友郁）

「フードバンク自販機」運用開始 1カ月で25件の利用

北海道済生会

5月24日、商業施設内にある済生会ビレッジで、専用コインを入れると食品セットを入手できる「フードバンク自販機」の運用を開始しました。

北海道済生会は昨年度、生活困窮者支援を1200人に実施しましたが、フードバンク自販機の運用でさらに支援の輪を広げたいと考えています。

専用コインはこれまで密に連携してきた小樽市や地域包括支援センター、居宅介護支援事業所等の職員を通して、支援が必要な人に配布。自販機ではフードバンク用以外の商品も販売しているため、人目を気にせず利用できます。

運用開始から1カ月で25件の利用があり、支援の必要性を改めて感じます。なお、今回の事業は済生会本部の生活困窮者支援事業優良事業に採択されたことで着手できました。

（ソーシャルインクルージョン推進室　土谷浩大）

〈茨城〉常陸大宮済生会病院

2回目のフードドライブ 食料品60点が集まる

6月24日から7月26日まで、職員更衣室通路前に「きずなBOX」を設置し、職員から食料品等の寄付を募るフードドライブを実施しました。

2回目の今回も多くの職員の善意により乾麺やレトルト食品などの食料品60点、段ボール2箱分が集まりました。

7月31日、フードバンク茨城水戸支部へ届けたところ、「夏は乾麺類の寄付が非常にありがたいです」とお礼の言葉が。届けた食料品は、生活困窮者自立支援のための食品ニーズに応えるほか、児童養護施設等の福祉施設に提供されます。

次回はお歳暮の時期に合わせて12月に実施する予定です。

（済生記者　笠井康宏）

子育て世帯向け食品配布・相談会 アウトリーチの重要性を再認識

〈栃木〉宇都宮病院

7月27日、フードバンクうつのみやで開催された子育て世帯向けの食品配布会（兼）相談会に、大塚美幸MSWと有馬悠平MSWが相談員として参加しました。

猛暑の中、子育て中の62世帯が来場。当院職員からの寄付で集まった食料品や生活用品のほか、生理用品も無料で配布しました。また、この日は学生ボランティアによるかき氷の提供があり、来場した子どもたちの顔にも笑みがこぼれました。

一方で、相談会では「夏休みで給食がなくて困っている」「物価高の中、夏休みをどう過ごすか」といった悩みの声も。そのほか、生理痛や貧血等体調に関する不安などさまざまな相談が寄せられ、アウトリーチを行なう重要性を再認識しました。

（地域連携課　秋山綾香）

奈良病院

飲料水をフードバンクに寄付

災害用備蓄水の入れ替えに伴い、賞味期限が近づいた飲料水600ミリリットルボトル24本入り46ケースを、7月5日にフードバンク奈良へ寄付しました。

フードバンク奈良は、ひとり親家族や生活が厳しい状況にある子育て世帯、子ども食堂に食品等を無償で提供しています。

当院はその趣旨に賛同し、これまでも備蓄水や日用品を寄付してきました。今回も担当者から「配付先の皆さんが大変喜んでくれます」との言葉がありました。

（総務課　藤井貴義）

吉岡更紗

Sarasa Yoshioka

この人 Vol. 172

古社寺の伝統行事で用いられる染和紙を長年手がける染織工房「染司よしおか」。6代目の吉岡更紗さんは職人でありながら、父の急逝に伴い5年前から工房と店舗の経営も担っています。家業に対する想いについて聞きました。

Text：木元優子
Photos：馬場稔子

人々に長く親しまれてきたものを私は粛々と守り続けたい

京都市伏見区にある工房では、紫草の根や紅花の花びら、茜の根、刈安の葉と茎などの植物から抽出した染料のみで、奥深い温もりを感じる美しい色が生み出されている。「昔から染料として記録されている植物以外は使わないと決めています。化学染料をやめる決意をしたのは、5代目だった父です。私も、古から伝わる染料に大きな価値を見いだしています」と穏やかな口調で話す吉岡更紗さん。

大学卒業後はイッセイミヤケの販売職を経て、家業を継ぐために父のすすめで愛媛県西予市野村シルク博物館で染織技術を一から習得。「古布など古いものにたくさんふれてきた父の姿を通して、ものの良し悪しを見極める力も養われました。さまざまな経験をし、自分の思いを全面に出してアレンジするよりも、ブラッシュアップしつつ、スタンダードなものづくりをするほうが私は好き、と思うようになっていきましたね」

東大寺二月堂の修二会や薬師寺の花会式、石清水八幡宮の石清水祭などで必要な染和紙を納めるために、染料にする植物の収穫にも出向く。「伝統行事に関わる仕事は、私たちの都合で中断するわけにはいきません。『変わることなく継承する』という強い意思を持って取り組んでいます」

よしおか・さらさ　1977年生まれ、京都府出身。幼い頃から家業に興味を持ち、2008年から父・吉岡幸雄のもとで染色の仕事に就く。2019年9月に父が心筋梗塞のため急逝し、「染司よしおか」6代目当主に。糸から染める経験も豊富な染織家であり、国宝の復元にも携わる。著書に『新装改訂版 染司よしおかに学ぶ はじめての植物染め』『「源氏物語」五十四帖の色』（原著・吉岡幸雄／ともに紫紅社）がある。

染司よしおか

江戸後期から200年以上続く京都の染織工房。絹や麻、木綿、和紙などの天然の素材を自然界に存在する植物と地下100mから汲み上げた伏見の水を用いて、手作業で一つひとつ染める。5代目の吉岡幸雄氏は出版・広告・催事の世界で才能を発揮する一方で、同工房の染師・福田伝士とともに日本の伝統色の再現に尽力した。京都市東山区には店舗「染司よしおか京都店」を構え、植物染ならではのやさしい色合いのストールやバッグ、小物などを販売。

口福（こうふく）にっぽん

吉井省一

昔ながらの白壁が美しい蔵屋敷と洋風のモダンな建物がみごとに調和している、倉敷の街。訪れる度に、その趣深さに魅せられてしまいます。

今回ご紹介するのは、そんな人気の観光地倉敷で見つけた、お洒落なアフタヌーンティースイーツです。

紅茶を飲みながら、スタンドに盛り付けられたサンドイッチやスコーン、ケーキなどを間食として楽しむ、19世紀の英国貴族たちの間で始まった優雅な食習慣、アフタヌーンティー。

それをさらに一歩進化させて和と洋の美味しいとこ取りした、目と舌で楽しめる、とっておきのお菓子をご紹介しましょう。

おうちで楽しめる風雅な和洋スイーツ

今回の「お家アフタヌーンティー」を創案したのは、倉敷市のレストラン「.KOMBINAT（ドットコンビナート）」。

日本の伝統をベースに現代的な要素を融合させるコンセプトでプロデュースされた個性的な店舗デザイン

（ドットコンビナート）。地元の建築事務所が倉敷の特産品「い草」と水島の工業地帯「コンビナート」を空間デザインに融合させてプロデュースしたお店です。

パスタやピッツァなど多彩なメニューと独特なインテリアで知られる人気店ですが、中でも個性的なアフタヌーンティーを気軽にお家でも楽しんでほしいと、お取り寄せを始めたそうです。

84 お家（うち）アフタヌーンティーセット

《.KOMBINAT（ドットコンビナート）》 岡山県倉敷市

この「お家アフタヌーンティー」は、壱（い）の菓、弐（に）の菓、参（さん）の菓の三つの木箱で構成されています。「壱の菓」にはチーズケーキやテリーヌなど4種類の洋菓子、「弐の菓」にはマカロンとスコーンがそれぞれ2種類ずつ、「参の菓」には石庭を連想させるクリームティラミスが入っています。

この「庭園ティラミス」が今回ぜひ紹介したかった注目スイーツ。「おもてなしセレクション2023」を受賞した話題の逸品です。

白砂がまかれた先に苔（こけ）をイメージした緑が見えて、庭石が美しくレイアウトされているビジュアルは、うっとりするほど見事、ジャパネスクの極みです。

これらが三つの小さな木箱にきれいに収まっています。

かわいい木箱から美味なる石庭が!?

それでは、まず「壱の菓」から。きなこを使ったギモーヴはふんわりもっちりした食感の生マシュマロ、抹茶のテリーヌは上品な甘さ、チョコフランボワーズは酸味とチョコの苦みが絶妙な大人の味、3種のベリーを使ったチーズケーキもさっぱりしていてとっても美味です。

次に、「弐の菓」へ。マカロンは桃&アーモンドと、抹茶。サクッと香ばしく軽い食感で、クリームもコクがありまろやか。

スコーンは同じく桃&ナッツと、黒ごま。そのままでも美味ですが、オーブントースターで軽く焼くと、香りが際立って食感もぐっとアップします。

それでは、いよいよ今回楽しみにしていた「庭園ティラミス」へ。白砂ならぬ濃厚なチーズクリームにゆっくりスプーンを入れていきます。コクのあるマスカルポーネクリームに合わせた生地には特製コーヒーシロップがたっぷり染み込んでいます。しっとりした食感、滑らかな口溶けから濃厚な旨（うま）みが波のように押し寄せ、ひとさじごとに口福感で満たされていきます。

庭石として鎮座（ちんざ）するのはチョコと黒豆。苔に見立てた抹茶からは上品な香りが漂います。これらがアクセントとしてティラミスの味を際立たせています。

この手の込んだスイーツにぴったりなのが、セットに入っている岡山県高梁（たかはし）市産の「高梁和紅茶」。海外産よりも渋みが少なく、ほんのり甘みがあって、なごみの時をやさしく演出してくれます。お好みのティーカップに入れて、倉敷特産のい草で仕上げたコースターでどうぞ。

しばし見とれるほど美しい、宝石箱のようなアフタヌーンティーセット。皆さんも英国貴族ならぬ〝令和貴族〟として、甘い時間を過ごしてみませんか。

誕生日用デザートプレートなど多彩な人気スイーツ

9種類のスイーツをじっくり楽しめる「お家アフタヌーンティーセット」。高梁和紅茶とい草仕立てのコースターが付いたセットがイチ押し（菓子などが入る木箱の大きさは一辺約10cm。4点×2の菓子は撮影用の板の上に載った状態）

水を使わず砂や岩などで山水を表現する、日本古来の石庭を模したこちらの"庭園"は、しっとりクリーミーな味わいが魅力

自家製ピッツァなど常連に愛されている人気料理

お家アフタヌーンティーセット
［3段スイーツ木箱（季節の小菓子8個＋庭園ティラミス）、
岡山県産高梁紅茶2P×2、倉敷い草コースター］
6,000円（税込・送料別）　消費期限……商品解凍後3日間

お取り寄せ・お問い合わせは
.KOMBINAT（ドットコンビナート）
〒710-0055 岡山県倉敷市阿知3-9-1 あちてらす倉敷北館124
TEL：086-454-5000
定休日：［通販］火曜日（水曜日は不定休）営業時間14:00～23:00
［店舗］無休　営業時間17:30～23:00
ホームページ：https://dotkombinat.stores.jp/

倉敷川沿いにレトロモダンな建物が建ち並ぶ「倉敷美観地区」は、観光客たちの人気スポットのひとつ

済生会の［病院・施設］がある県内の市町村

よしい・せいいち　一般社団法人日本作詩家協会理事。コピーライター時代に老舗百貨店の食の通販誌で約30年執筆に携わり、試食した食品の数は1万点を超える。

ハロウィン★かぼちゃおばけかざり

置き

アレンジ：台紙つき

かお

1 折り目を付けて、中心に折る

2 点線で折る

3 裏返す

4 図のように点線で折る

1.5cm

5 図のように点線で折る

6 折り目を付けて戻す。裏にも同じように折って戻す

山折り
谷折り
裏返す

だれでもかんたん てづくりおもちゃ

7 折り筋で中に折り込み、裏返す

8 右を開く

9 図のように中心から1/3を折る

10 折り戻す。左も⑧～⑩と同じように折る

11 図のように手を折り、下を後ろに折る

1cm

12 手の先を後ろに折る

ぼうし

1 1/4に切った折り紙に折り目を付けて、中心に折る

2 点線で折り、中に入れる

3 裏返す

4 図のように点線で折る

5 点線で折る

完成

ぼうしをかぶせ、かおをかいて完成

台紙

折り目を付けて、角を中心に折り、裏返す

アレンジ

台紙を図のように点線で折り、立たせてかぼちゃおばけの後ろにはる

のり

2.5cm

帽子の先を折ってもかわいい！

台紙にメッセージをかいてね

のり

新作のプレゼントがあります！

詳しくは51ページを見てね♥

【いまいみさ】手づくりおもちゃ作家。折り紙や牛乳パックなどをリサイクルして手づくりの楽しさを伝えています。著書に「365日たのしい折り紙」（日東書院）、「12か月のおりがみ髪飾り」（講談社）など39冊。最新刊は「1年中使える！決定版おりがみ図鑑」（講談社）。

動画もcheck!

作品・折り図：いまいみさ　おりがみ協力：株式会社トーヨー

〈福井〉特養聖和園。利用者さんと大野市・スターランドさがだにのひまわり畑で夏を満喫。この写真の記事は48ページをご覧ください。

topicS

病院広報アワード 済生丸VRが優秀賞に輝く

岡山済生会総合病院

病院の優れた広報活動を年に一度表彰する「病院広報アワード」（CB news主催）の表彰式が7月10日に行なわれました。

当院は「済生丸のVR見学ツアー」でエントリーし、順調に二次審査を突破するもセミファイナルで敗退。それでも全国の病院から252件ものエントリーがあった中「その他部門・優秀賞」を受賞し、全国の皆さんに済生丸を知ってもらうきっかけになりました。

VR体験で実際に見える画像

この作品は、VRゴーグルを装着すると実寸大の済生丸の船内を見学できるというもので、昨年当院で開催した済生会フェアに展示しました。今後は10月13日の香川県済生会病院、11月9日の広島病院での済生会フェアに続き、来年2月の済生会学会にも出展予定です。

（広報企画課　六岡智輝）

★リアル診療船体験、済生会フェアで大好評でしたよね！　学会での出展楽しみです。

（本部広報課　杉山菜央）

〈茨城〉水戸済生会総合病院 小児食物アレルギーの経口負荷試験普及へ

当院小児科では貴達俊徳主任部長を中心に、昨年度は1000件以上の小児食物アレルギーに対する食物経口負荷試験を行ないました。今年度も2000件を超えるペースで検査を行なっています。

実際に食品を病院で食べて症状が出るかを確認する食物経口負荷試験は、食物アレルギー診療の基本である「必要最小限の食物除去」を実現するために必須の検査です。食物アレルギーがある食品でも食べられる範囲で定期的に摂取を続けることで、アレルギーが徐々に改善することが期待できます。治療を終えた子には、メダルや賞状を授与して食物アレルギー卒業をお祝いしています。

貴達医師は「今後も食物アレルギー診療の普及に尽力し、地域医療に貢献します」と目標を語りました。

（済生記者　今野正俊）

〈大阪〉吹田病院 術前術後のリハビリ導入で腹壁ヘルニア再発率低下

7月15日、聖隷浜松病院のヘルニア担当医師とスタッフ2人が来院し、腹壁ヘルニア手術の術前術後での理学療法について見学と情報交換を行ないました。

当院ヘルニアセンターでは2022年1月から、腹壁ヘルニア手術の術前術後に理学療法を導入しています。入江保雄中央技術部副部長を中心としたリハビリテーション科腹壁チームの取り組みによるもので、術前からの介入は術後の症状に改善をもたらし、特に疼痛の軽減には有意な効果が確認されています。

従来、術後再発率が高いとされる腹壁ヘルニアですが、当院ではリハビリ導入後の再発率が低下。当院ヘルニアセンターへの腹壁ヘルニアに関する患者紹介は府内の基幹病院や府外からも広く寄せられるようになり、導入後2年間で約100人を超えました。

（総務課　中川祐紀）

〈大阪〉富田林病院 タイの短期留学生が作業療法の現場を見学

7月30日、タイのマヒドン大学からの短期留学生2人（作業療法学科）が施設見学のため来院しました。2人は7月中旬から約1カ月間、大阪河崎リハビリテーション大学に留学しています。

留学生はまず院長室を訪れ、宮崎俊一病院長からの激励に「頑張ります！」と元気に返答。その後、済生会の使命などについて説明を受け、主要施設と実際の作業療法場面を見学しました。

作業療法場面では、国を超えて共有できる部分も多くある一方で、日本ならではの細部に配慮された福祉用具の活用やリハビリ体制に関心を寄せていました。

受け入れを行なった当院にとっても日々の業務を見つめ直すきっかけになり、非常に有益な機会になりました。

（済生記者　島崎寛将）

topicS

〈岩手〉北上済生会病院
親子で楽しむ夏祭り

7月26日、当院附属のなでしこ保育園で「夏祭り会」を催しました。

職員が養育する0歳から6歳までの未就学児が利用するなでしこ保育園。現在在籍する6人の園児たちは、スタンプラリーやボウリング、金魚すくいや屋台メニューなど、先生たちのアイデアが光る手作りの夏祭り会に大興奮。浴衣や甚平で参加する子もいて、お祭り気分をさらに盛り上げていました。

お化け屋敷では「こわいよ～こわいよ～」と言いつつ、皆果敢に突入！ 見事脱出して、ご褒美のメダルをゲットしていました。

たくさん食べて遊んで、すてきな夏の思い出ができました。

（済生記者　掛川千恵子）

〈栃木〉宇都宮病院
ブレックス・竹内選手が小児用車いすを寄贈

7月19日、プロバスケットボールチーム・宇都宮ブレックスの竹内公輔選手から小児用車いすの寄付をいただきました。

竹内選手は、ホームゲームで1勝または自身がダンクシュートを決めるごとに車いすなどを医療機関に贈る活動を、宇都宮市で福祉道具を製造する会社と共同で行なっています。

贈呈式を終えた後、竹内選手は車いすが使用される予定の小児病棟へ移動し、入院する子どもたちと交流。206センチの竹内選手に子どもたちも職員も圧倒されましたが、子どもたちは絶え間なくサインを求め続け、その人気ぶりがうかがえました。

竹内選手の心温まる取り組みに感謝の気持ちでいっぱいです。今後の活躍を心から願っています！

（済生記者　川原彩花）

〈山口〉豊浦病院
在宅サービス協議会に参加 次回は下関市で開催

7月13日、大阪新阪急ホテルで行なわれた第22回全国済生会在宅サービス協議会に、下関市豊浦地域ケアセンターから7人、当院から3人が参加しました。

当日は全国の済生会の事業所から参加した約200人が一堂に会し、総会・全体会議の後、五つの部会に分かれ情報交換やディスカッションを実施。その後、シンポジウムと懇親会が行なわれました。

次回の開催担当は豊浦地域ケアセンターとなるため、阪田健介センター長が最後に挨拶しました。

（済生記者　西田千鶴）

福島総合病院
「ふくしまのおしごと本」に当院看護師

地元のテレビ局（福島テレビ）が今年度から発行する「ふくしまのおしごと本」に、当院の小林裕希看護師（入職3年目）の取材記事が掲載されました。

39種の職業を県内事業所とともに紹介する冊子で、授業の副読本として県内の中学2年生全員に配布されています。職場体験を控えた中学2年生が興味のある分野を調べ、さまざまな職種を知るための一助となるもの。一職種一事業所の掲載のため、病院で掲載されたのは当院のみです。

看護師不足が叫ばれる中、冊子の効果もあったのか6～7月に計7人の中学生が当院へ職場体験に来てくれました。興味津々で積極的に質問をする中学生に、私たちも病院で働くことの意味を積極的に発信していかなければならないと強く思いました。

（済生記者　齋藤有里）

神奈川県病院
子どもおたのしみ会に出展 スライム作りが大人気！

7月28日、老人福祉センター横浜市うらしま荘で開催された「子どもおたのしみ会」に職員5人（看護師2人、保健師1人、事務2人）が参加し、健康相談とスライム作りのブースを出展しました。

本イベントは地域の児童委員主催のもと、地域の協議会や小学校、ボランティアが協力して運営。約300人の来場者でにぎわい、2時間という限られた時間の中で健康相談には31人、スライム作りには110人もの子どもたちが参加し大盛況でした。

参加した職員も「笑顔が絶える時間がないくらい子どもたちが楽しんでくれたので、自分も一緒に楽しむことができた。皆の笑顔を見ていたらあっという間に2時間が経っていた」と充実感でいっぱいでした。

（済生記者　小山友輝）

topicS

業務Up to date研修会 施設ごとの取り組みを共有

〈愛媛〉松山病院

7月20日、当院担当で「令和6年度愛媛県済生会病院業務Up to date研修会」を松山市内のホテルで開催し、松山病院、今治病院、今治第二病院、西条病院、小田診療所の5施設から60人が参加しました。

当日は、診療報酬改定への取り組みについて各病院の看護部門、栄養部門、事務部門が発表を行なった後、各部門に分かれてグループワークを行ないました。施設ごとの取り組みや困っていることなどを共有することで、互いに大きな気付きや学びを得る機会となりました。

今後も同じ済生会の仲間として、相談や助け合うことができるよう、横のつながりを大切にしていきます。

（医事課　冨田貴浩）

東神奈川リハビリテーション病院

商店街プロレス発祥の地で熱いバトルをサポート

8月3日に行なわれた「商店街プロレスシリーズ2024〈第2戦〉六角橋商店街プロレス」に、医療班として当院から医師と看護師を派遣しました。

六角橋商店街は商店街プロレス発祥の地。20年前から毎年開催されている地域の人気イベントには今年も300人以上の観客が集まりました。

当日は夕刻開始にもかかわらずとても気温が高く、熱中症等が危惧されましたが、無事にイベントは終了。試合開始前にはリング上で医師や看護師もアナウンス紹介されるなど、職員にとっても貴重な体験になりました。これからも地元とのつながりを大事にした地域交流を推進していきます。

（事務部　医事課長　濵﨑啓師）

〈埼玉〉加須病院

中学校教職員へBLS講習

7月23日、加須市立昭和中学校の教職員約20人を対象に、BLS（一次救命処置）講習を行ないました。

看護師6人が講師を務め、講義では救命現場に遭遇した際の「心停止発見・助けを呼ぶ・心肺蘇生」の大切さを解説。熱中症の救急搬送基準や対処法も併せて説明しました。

その後、AEDの使い方、胸骨圧迫のコツや周囲の安全確保、自分が行なっている動作の宣言（声出し）の重要性を実演しながら伝え、AED訓練人形を使いBLSの反復練習を行ないました。

受講後、参加者からは「学校内外で想定されるさまざまなシーンでの対応法を学ぶことができた」「大変勉強になった」など好意的なコメントがありました。

（済生記者　蓬田絵里子）

熊本病院

僅差でつかんだ19連覇！九州からいざ全国へ

6月16日に福岡市で開催された第46回済生会九州ブロック親善ソフトボール大会で、当院チームが見事優勝。同時に、九州大会19連覇という大快挙を達成しました。

出場したAパートは過去の大会成績により選出された上位4病院（熊本、大牟田、日田、みすみ）の総当たり形式による戦いでした。

1試合目のみすみ戦は1対1で引き分け、続く大牟田戦は10対2で勝利。みすみと大牟田による一戦は、みすみが13対4と大量得点で勝利を挙げました。しかしその後、当院が日田との最終戦で見事に追い上げ8対0で勝利。この結果、みすみに1点の得失点差をつけ、優勝と全国大会への切符を勝ち取りました。

劇的な試合展開で盛り上がりも最高潮に達し、喜びとともに優勝カップを持ち帰ることができました。（総務室　前川賢志）

〈埼玉〉川口総合病院

健康講座で好評博した二つの体操をWEBに公開

6月に開催した「済生会健康講座2024」で行なった二つの体操を、当院公式YouTubeチャンネルで配信しました。

一つは、摂食・嚥下障害看護認定看護師の野口久義さんによる「健口（けんこう）体操」。食事の際のむせや、口や舌の運動に不安を感じる人向けに、口や舌の運動、発音練習などを実演しています。

もう一つは、理学療法士の高橋麗さんによる「みんなで活き！生き！長息（ながいき）体操！」。日常生活の中で息苦しさを感じる人向けに、呼吸の基本、身体のストレッチ方法を実演しています。

どちらも、「講座で行なった体操を家でもやりたい」というアンケートでの要望に応えたもの。野口さんと高橋さんからは「自宅でも簡単にできます。無理せず、楽にできる範囲で行なってください」とのメッセージがありました。

（済生記者　原　衣里奈）

祝！「肝ぞう教室」200回開催

福井県済生会病院

2006年4月に始めた「肝ぞう教室」が、7月10日、節目の200回目の開催を記録しました。

県内唯一の肝疾患診療連携拠点病院として積極的に肝疾患の診断・治療を行なう当院では、その取り組みの一環で「肝ぞう教室」を定期的に開催。日本肝臓学会認定肝臓専門医で内科部長の真田拓医師を中心に肝炎コーディネーター（看護師、薬剤師、管理栄養士等）が毎回テーマを設けて講義を行ない、参加者に正しい知識と情報を提供しています。

200回記念の今回は10人が参加。特別な啓発グッズも用意しました。参加者からは「肝臓についての知識がより深まった。定期的に専門家から正しい情報が得られるのはありがたい。次の機会も参加したい」とコメントをいただきました。

（総務・企画課　山村健太）

〈広島〉老健はまな荘

唐津医療福祉センターで経営改善のヒント得る

7月18・19日、職員5人で佐賀・唐津医療福祉センターを視察に行きました。

1日目は老健まつら荘と特養めずら荘へ。「施設を見学するだけでなく会議の内容も見てもらっては」との園田孝志支部長の計らいで、二つの会議に参加しました。

2日目も朝から三つの会議に参加。その後の職種に分かれての意見交換では、互いの施設の情報交換に熱が入り、あっという間に時間が過ぎました。帰りの時間もあるため、続きはメールや電話で行なうことにしました。

今回の視察で、支部内各施設・事業所との連携強化による入所稼働率の向上など、いくつかの経営改善のヒントを得ました。いずれはまつら荘やめずら荘のように、機能性に優れた優美な施設にできるように努めます。

（済生記者　佐藤　聡）

topicS

〈滋賀〉守山市民病院

職員の〝熱〟を感じた院内学術研究発表会

院内学術研究発表会を7月20日に開催し、発表者・審査員等を含む65人が参加しました。

今回は7部署・2チームから計10演題のエントリー。前日にはリハーサルできる時間が設けられ、発表者が何度も練習をする姿が見られました。

当日の発表後の質疑応答も活発で、「積極的な質問によって発表内容の理解がより深まった」「職員の熱を感じた」と会場の参加者にとっても大きな刺激になりました。

最優秀賞には小児科・國津智彬副部長、優秀賞には（当時）人工透析センター・松井千咲看護師、観客投票による観客賞には医事課・石川毬乃主事が選出。後日、表彰状と景品（QUOカード）が贈られました。

（済生記者　中嶋元香）

〈熊本〉みすみ病院

7年ぶりの「宇天医会」直接会って話す意義を実感

8月2日、熊本県上天草市内のホテルで「宇天医会～講演と連携の会～」を7年ぶりに開催しました。

宇城・天草地域の連携会議であることから「宇天医会」と命名され、以前は学術講演会を中心に行なっていました。今回は院長交代による新体制移行を機に、多職（業）種との連携強化を図る目的での開催としました。

当日は近隣の開業医・歯科医の先生をはじめ、病院、調剤薬局、介護施設、訪問看護ステーションなどから41人が参加。「リモートではなく、直接会って話すことの大事さを再確認した」「院内外の先生同士が話されている姿を見て、この会の意義を実感した」という声があちこちから聞こえました。

（医療連携部　内田耕人）

topicS

〈福岡〉飯塚嘉穂病院
地域医療機関のさらなる連携強化を

6月19日、飯塚市のバドドゥ・ル・コトブキで「地域医療連携の集い」を行ない、30施設から60人が参加しました。

この会は「筑豊なでしこの会」として毎年行なっていたもの。ここ4年は感染予防の観点からオンライン開催にしていましたが、新院長を迎えて装いも新たに再開しました。

関口直孝新院長の挨拶に続いて、髙木陽一・呼吸器内科主任部長が「呼吸器科診療　最近の話題」、瓜生拓也・整形外科主任部長が「弯曲型非定型大腿骨骨折の手術療法」について講演。その後は懇親会で交流を深めました。

地域の先生方から活発な質問やご意見をいただき、大変有意義な会となりました。

（地域医療連携室課長　濵﨑妃沙子）

寸劇で「鍵」への意識を再確認

〈埼玉〉鴻巣病院

当院は済生会で唯一の精神科単科病院で、病棟への入口はすべて施錠されています。患者さんの安全を守るために施錠の徹底はとても重要です。そこで、6月9日を鍵の日（ロックの日）として施錠確認週間を設け、職員に鍵に対する意識を再確認してもらっています。

7月17日には今年度初の医療安全管理研修会を院内で開催し、52人が参加。講義のほか、鍵にまつわる寸劇を行ないました。平成の看護ドラマを参考に、長年精神科看護に携わる先輩が入職間もない後輩の前で鍵をかけ忘れてしまうという展開で、「人は間違える」という特性を知る機会としました。

寸劇の脚本は〈埼玉〉鴻巣老健こうのとりの師長が作り、役者から大道具や撮影などの裏方に至るまですべて職員が担当。部署を超え、意見交換を重ねて作り上げる楽しみを感じる機会にもなりました。

（医療安全管理室　中島あゆみ）

〈広島〉老健はまな荘
また会おう！外国人同僚と涙の別れ

ベトナムから介護の技能実習生として来日し、その後、特定技能外国人として3年8カ月勤務してくれたダオ・ティ・ビック・ゴックさんが、7月15日付けで退職しました。

ゴックさんは利用者さんと職員からもとても愛されていました。勤務成績は良好で、介護職員初任者研修を修了。介護福祉士実務者研修を受講予定で、日本語能力試験N2にパスするなど、キャリアアップにも積極的に取り組んでいました。当施設としては何とか残ってほしい人材でしたが、家庭の事情ということで泣く泣く諦めることになりました。

最終勤務日、利用者さんとの記念撮影は涙で一時中断。それでも最後は笑顔で送り出しました。ゴックさんの「介護福祉士になったら絶対に、はまな荘へ戻ってきます」という言葉を信じて待ちたいと思います。

（済生記者　佐藤　聡）

滋賀県病院
乳がん患者会を守山市民病院と合同開催

7月26日、乳がん患者会「あけぼの会」の講演会と相談会を当院と滋賀・守山市民病院で合同開催。会場の守山市民病院くすの木ホールには乳がん患者さんやご家族27人が来場しました。

前半は当院乳腺センター長の大内佳美医師が「乳がんの基礎と遺伝子診断」と題して講演。質疑応答の時間では積極的に質問する人が多く、治療に対する皆さんの思いの深さを感じました。

後半の相談会では当院で乳がん治療に関わるさまざまな専門スタッフも参加し、グループに分かれて個別相談を行ないました。参加者からは「悩みがスッキリした」「勇気をもらえた」など多くの声がありました。

合同開催ということもあり病院間の連携は大変でしたが、スタッフ全員の協力により無事に終えることができました。

（健診センター　鰐部亜砂子）

topicS

山口総合病院

特定行為研修修了者育成活動の幅を広げる工夫も

当院では2020年から9区分23行為の特定行為研修を実施しています。研修修了者は根拠に基づいた看護介入が可能となり、医師のタスクシェア・シフトへの寄与だけでなく、看護師の相談役としての役割も担っています。

現在は特定行為研修の4期目で、昨年10月から4人の研修生が受講中。筆者を含めた特定行為研修修了者1期生3人が、研修生の指導に携わっています。

今後は特定行為修了者が所属部署以外でも横断的に活動ができるよう、医師をはじめ全職員に向けた特定行為の依頼先や勤務状況を一覧にした「特定ナースだより」を作成し、活動の幅を広げます。

（特定行為研修修了者　湯面真吾）

〈岩手〉北上済生会病院

東北・北海道全体の価格交渉力強化へ

7月4・5日、今年度の第1回東北・北海道ブロック共同購入グループ会議が当院で開催され、事務部長・用度担当者など14人が参加しました。

第3期中期事業計画で目標に掲げられている「医療材料のベンチマークシステムC・D判定割合20％以下」を目指して、今年度は新しい取り組みを実施。MRPベンチマークシステムを活用した価格交渉の進め方について、小樽病院から説明を受け、実際に各担当者が診療材料・医薬品の資料とリスト作成を行ないました。

今後はブロック全体での目標達成に向けて、各施設が体制づくりやタスク表を作成し、ブロック内でウェブ上での進捗管理を行なうほか、対面での会議を10月に開催する予定です。

（済生記者　掛川千恵子）

〈大阪〉中津病院

昭和初期の当院改築の功労者を讃える「嘉門祭」

7月1日に「嘉門祭」を開催し、約100人が当院庭園の嘉門氏頌徳碑を訪れました。

昭和10年、資金難で改築計画が頓挫しそうになった当院はメリヤス商の嘉門長蔵・コマご夫妻からの多額の寄付により移転改築することができ、大阪府民から「東洋一の救療病院」と呼ばれる中津病院が落成しました。

嘉門長蔵氏は落成式約3カ月前の7月1日に逝去。当院では毎年、嘉門氏の命日にその功績を讃えるとともに感謝と敬意を込め、嘉門氏のご子孫を招待し「嘉門祭」を行なっています。

当日は大雨の予報でしたが、開催前に雨が上がり、嘉門ご夫妻に見守られているようでした。

（済生記者　鈴木亜希乃）

福岡総合病院

看護学生と安らぎを編む「まふマフ」の輪

認知症マフを「まふマフ」と名付けケアに使用している当院では、職員向けに昨年からマフ製作のワークショップを開催しています。4回目は7月5日に開催し、純真学園大学の看護学生16人がボランティアで参加。職員9人（看護師7人、MSW・検査部助手各1人）と共に製作に挑戦しました。

講師役の職員からサポートを受けながら、各自選んだ毛糸を編み進めます。慣れない編み物に戸惑う様子も見られましたが、真剣に取り組む姿が印象的でした。「難しかったけれど楽しかった」「新しい経験ができた」「また参加したい」と学生さん。引き続き、学内のボランティア時間で製作してくれるそうです。

学生さんのみずみずしい感性で製作された「まふマフ」が届くのが今から楽しみです。

（看護部　田坂真理）

静岡済生会療育センター　令和

皆でワッショイ！夏休みの楽しい思い出に

8月7日、当センター内で「夏のお楽しみ会」を行ないました。

お祭りの軽快な笛太鼓が聞こえてくると、入所者さんの写真で飾り付けをした素敵なお神輿が登場。自分の写真を見つけてうれしそうに手をたたく人もいました。お神輿を引いたり、うちわで扇いだり、35人の入所者さん皆で「ワッショイ！　ワッショイ！」と盛り上がりました。

出店はカラフルジュース屋さん。ブルーハワイやいちご、レモン、メロンのシロップで作った鮮やかな色のジュースに興味津々で、皆さんゴクゴクと美味しそうに飲んでいました。

入所者さんの素敵な笑顔があふれる一日となり、楽しい夏休みの思い出になりました。

（済生記者　大須賀彩音）

〈三重〉松阪総合病院

5年ぶりの野外研修 新入職員が親睦深める

5年ぶりの新人野外研修を6月28日から1泊2日の日程で、奥伊勢フォレストピアを会場に実施しました。

新入職員68人と引率者13人が参加。医療安全、教育、メンタルヘルス、多職種連携などについて研修を行ないました。

野外研修の狙いの一つは、病院を離れて時間を共に過ごし、職員間の親睦を深めること。朝からあいにくの雨で、野外でのBBQの心配をしていましたが、皆さん気にせず食事とお酒を楽しんでいたようで安心しました。

参加者からは「楽しかった」「いろいろな人と話ができてよかった」などの声がありました。

（総務課　中島朋子）

〈鹿児島〉サービス付き高齢者向け住宅なでしこの杜

ゴスペルの力強い歌声でハッピーバースデー

月に一度の「お誕生日会」を7月17日に開催しました。7月生まれは、99歳の男性最長寿者と81歳の一番若い女性の2人。外泊者を除く35人の入居者さん全員でお祝いしました。

今回は合唱の慰問を久しぶりに再開し、入居者の娘さんが所属する5人のゴスペルグループが来訪しました。「ハッピーバースデー」に始まり7曲ほど披露され、久々に耳にする迫力の歌声に皆さん大変感動していました。娘さんと楽しい時間を過ごした入居者さんもうれしそうでした。

また、介護士の話では多くの入居者さんはその晩、いつになく穏やかな一夜を過ごしたとのことです。

（済生記者　大迫良代美）

topicS

放射線治療室に興味津々 内覧会に職員50人が参加

新潟県央基幹病院

6月27日、放射線部主催で全職員を対象とした放射線治療科内覧会を開催し、約50人が参加しました。

病院で働いているスタッフでも入ることが少ない放射線治療室。患者さんがリラックスして治療が受けられるよう、天井には空や木々のフィルム写真が貼られ、鳥のさえずりのBGMが流れます。病院であることを忘れてしまうような不思議な空間に、参加したスタッフも驚いていました。

質問の時間も設け、参加したスタッフから寄せられるさまざまな疑問に放射線部スタッフが次々と答えていきました。担当者の放射線部・山岸隆宏さんは「今回は非常に多くのスタッフに参加していただけたので、2回目の内覧会も計画したい」と意気込みを語りました。

（総務広報課　渡邊真衣）

〈北海道〉小樽病院

QCサークル大会に向けてキックオフ研修会

本年度のQCサークル（小集団改善活動）大会に向けたキックオフ研修会を、6月27日に当院講堂で実施しました。

当日は、看護部・医療技術部・事務部などでそれぞれQC活動に携わる職員約30人が参加。

はじめに、苫小牧市・王子総合病院訪問看護室の看護師による実例発表が行なわれました。同院看護師は、同じ院内にありながら訪問看護室と病棟の連携が弱かったことから、病棟からの相談件数を増やそうとフローチャート変更やPRポスター作成などを通じて目標を達成したことを報告しました。

また、QCサークル北海道支部副世話人が、課題解決に必要なコミュニケーションスキルについて演習を通じて指南しました。本年度の院内QC大会は11月に開催予定です。

（済生記者　定　淳志）

東神奈川リハビリテーション病院

地域包括ケア推進に向けて医療・介護の連携を強化

令和6年度横浜市疾患別医療・介護連携事業（摂食・嚥下）運営会議が7月8日に開催され、地域の関係職種23人が参加しました。

同事業は糖尿病、摂食嚥下、心疾患、緩和ケアの4分野について、医療・介護の連携体制づくりに取り組むもの。当院からは摂食・嚥下の分野で鈴木俊幸医師、寺見雅子看護師、筆者（事務員）の3人が参加しました。

当日は関係職種からの現状報告や課題等の検討が行なわれ、今後については多職種連携研修実施や地域資源リストの作成を進めていくこととなりました。

（事務部　医事課長　濵﨑啓師）

topicS

若原看護師に外務大臣から感謝状

滋賀県病院

昨年2月に発生したトルコ・シリア地震において国際緊急援助隊医療チームの一員としてトルコに派遣され、被災者支援に尽力した当院の若原聖徳看護師に、8月1日、外務大臣から感謝状が授与されました。

授与式は東京都港区の外務省飯倉公館で行なわれました。式典を終えた若原看護師は、その足で済生会本部を訪ね、炭谷茂理事長や松原了理事との意見交換会に出席しました。

若原看護師は「活動は1年前ですが、久しぶりに共に活動した人たちと再会し、あの時の苦労などを分かち合うことができました」と授与式を振り返り、「全国の済生会の同志からの激励を日々の業務につないでいきたい。今後も当院から地域社会を越えて世界へ貢献する人材の輩出が続く一助になればと思います」と今後について話しました。

（済生記者　有馬真由美）

不用紙で塗り絵を試作

〈静岡〉ワーク春日

7月10日、当施設で制作した塗り絵を区内のいけがや保育園に届けました。

当施設では、不用になった紙や封筒を再利用し、ノートやメモ帳を作成しています。今年度は、ノートの表紙も手がけたイラストレーターのMIKEIさんに依頼し、塗り絵を制作。当初は点字も入れてみようと「あいうえお」の言葉遊びを言語聴覚士にも協力してもらいながら作ってみました（点字を入れるのは技術的に難しく断念）。

試作品は1冊11枚セットで30冊ほどでき、川奈臨海学園やいこいの家など済生会の児童施設、地域の保育園でも使ってもらい、子どもたちの様子なども聞かせてもらっています。

今後は、済生会フェアなどのイベントでの販売に向け、利用者さんと一緒に作っていきたいと考えています。

（施設長　阿部ゆかり）

小樽の街を練り歩き 創立100周年をPR

〈北海道〉小樽病院

小樽の真夏の風物詩、第58回おたる潮まつりの「潮ねりこみ」が7月27日に行なわれました。

潮まつりは100万人が来場する小樽最大のイベントで、「どんどこざぶ～ん！」の音頭で踊る潮ねりこみはその目玉。市内外の団体が多数、市内中心部を踊りながら練り歩きます。

北海道済生会は恒例の梯団を組んで、近藤真章支部長や和田卓郎病院長をはじめ、職員や家族も含む約90人が参加。そろいの浴衣や半纏（はんてん）姿、両手に鳴子を持ち、背中の帯に100周年のうちわを差した小粋な出で立ちで出発し、ゴールの中央ステージまでの約1キロを踊り切りました。

沿道を埋める市民や観光客には100周年ロゴマーク入りのうちわを配布し、北海道済生会の節目をPRしました。

（済生記者　定　淳志）

登録医総会に84人 南海トラフ地震が演題に

和歌山病院

7月6日、ダイワロイネットホテル和歌山で第16回登録医総会を開催し、昨年を上回る84人の参加がありました。

特別講演では、和歌山ろうさい病院救急科・集中治療部長の岩﨑安博医師が「南海トラフ巨大地震に備えて求められる医療体制」をテーマに、過去の災害地での経験を例に、DMATの大切さやいつ起こるか分からない災害への備えについて話しました。

院内からは一般演題として、脳神経外科・三木潤一郎医師が「当院における片頭痛診療の現状」、外科部長・中井博章医師が「当院における鼠経（そけい）ヘルニアの治療」の2題を発表。

会場からは質問も多く、活発な質疑応答が行なわれました。また、総会後の懇親会では地域の先生方と親睦を深めることができました。

（済生記者　松元靖寿）

topicS

フリーアナウンサーの志田陽菜さん（左）と福島院長

〈岩手〉北上済生会病院
エフエム岩手から情報発信

当院のFMラジオ番組「北上済生会病院presents　地域とともに」（エフエム岩手）が始まりました。和やかな雰囲気の中、院内で収録しています。

初回は7月5日、福島明宗院長が番組の内容や当院の取り組みなどについて話しました。第2回は7月19日、岩手県済生会の伊藤彬支部長が当院の成り立ちについて語りました。

毎月第1・3金曜日の16時15分から5分間オンエアされるこの番組で、地域と当院スタッフをつなぐとともに、地域の皆さんに当院の魅力や役立つ情報を発信していく予定です。

（済生記者　掛川千恵子）

〈大分〉日田病院
車椅子研修会で移動のコツなどを学ぶ

移動介助が必要な患者さんに安心して受診していただくための「ヘルプカード」運用開始に伴い、8月6日、車椅子研修会を当院で開催しました。

当日は職員20人ほどが受講。理学療法士の指導で、院内では経験することの少ない段差や坂道での昇降練習を行ないました。力づくではなかなか動かないのですが、簡単に移動できるちょっとしたコツや、患者さんが危険やストレスを感じることなく坂道を降りる方法などを学びました。

患者役のスタッフも「歩くより速く感じる」「坂道は後ろから降りると怖くないね」など、実際に体験することで新たな発見を得ていました。

（画像診断部　倉掛真紀子）

静岡済生会総合病院
職員と看護学生を対象にHPVワクチン集団接種

7月8・10・17日の3日間、当院職員と法人内の看護学生を対象に子宮頸がん予防のHPVワクチン・キャッチアップ集団接種（第1回）を実施し、89人が接種を受けました。

HPVワクチンは予防接種法に基づく定期接種のワクチンですが、積極的な接種勧奨が控えられていた期間に接種機会を逃した人が多く、キャッチアップ接種制度が設けられました。

これを受け当院では、平日に医療機関に行くことが難しい職員に接種機会の提供ができないかと考え、産婦人科・小児科の協力のもと今回の院内集団接種が実現しました。今後、第2回を9月、第3回を来年1月に実施予定です。

（ウェルネスセンター　主査　矢部菜美）

〈福井〉特養聖和園
夏のひまわり畑で「元気」をもらおう

7月13日、当施設わらびょうデイサービスセンターの利用者さん6人と職員3人で、「スターランドさかだに」の1万本のひまわり畑を見学しました。

今回の見学は「咲き誇るひまわりを見て夏を感じてもらいたい」との思いで企画。夏の日差しの中、ひまわりの鮮やかな黄色が目を引き、皆さんの心を躍らせていました。

ひまわりの花言葉「元気」にふさわしく、利用者さんのみならず職員も元気をもらい、笑顔が絶えないひとときを過ごしました。自然の美しさに触れ、夏の思い出として心に深く刻まれました。

「なかなか自分では来られんでありがたかった」「こんな日に（デイに）来られるなんてもうけた」という利用者さんの言葉に、来てよかったと思いました。

（済生記者　野尻　宗）

〈広島〉老健はまな荘
老健大会シンポジウムで講演

8月2日に開催された「第7回中国地区介護老人保健施設大会in岡山」（来場者400人）に当施設から7人が参加しました。

広島県介護老人保健施設協議会からの推薦を受けて、当日のシンポジウムでは新宅佑一介護係長が「当施設における人材確保の現状とこれから」と題して講演。技能実習生の受け入れ、アクティブシニア層の募集、養成校へのボランティア募集、就労しながら資格取得できる体制づくり、次世代への介護職の普及と啓発活動など、当施設の取り組みを説明しました。

「今後も介護の魅力を継続的に発信し、働きやすい職場環境を整えなければならない」と新宅係長。初の大舞台での発表をなんなくこなし、大物の風格を感じさせていました。

（済生記者　佐藤　聡）

〈新潟〉特養長和園
夏の夜空を彩る4000発の花火に感嘆

7月27日、第20回三条夏まつりが開催され、約4000発の花火が打ち上げられました。

打ち上げ会場に近く、大迫力の花火を間近で観ることができる当園には、打ち上げ開始時間に合わせて駐車場に16人の利用者さんが集合。やがて色鮮やかな大輪の花火が夜空を彩り、ドーンドーンという大きな音が響き渡りました。

花火が打ち上がる度に利用者さんから歓声が上がり、拍手をする人、「とてもきれいだね」と感嘆する人、花火にまつわる思い出を語る人など、思い思いに楽しむ姿が見られました。

今年もまた一つ素敵な夏の思い出ができました。

（済生記者　布施優子）

〈静岡〉特養小鹿なでしこ苑
焼きそば&フランクフルト2時間で完売

小鹿自治会主催の夏祭りが8月3日にあり、当苑職員9人が参加して焼きそばとフランクフルトの店を出店しました。

当日は焼きそば460パック、フランクフルト600本を準備。17時の開始時点では人がまばらで売れ行きが心配でしたが、気がつくと長蛇の列ができて大忙しとなり、2時間ほどで完売しました。「まだ食べたかったよ」「おいしかったよ」と声をかけてもらい、とても達成感がありました。

今年は事務員の出店のみでの参加でしたが、来年は5年前のように利用者さんとご家族も参加して祭りの雰囲気を一緒に楽しみたいです。その際は焼きそば500パック、フランクフルト700本くらいは用意しないと足りないかもしれません。

（済生記者　石田遼祐）

〈福岡〉デイサービスセンター天拝
伝統的な遊びとおいしい食べ物で夏祭り気分

7月18・19日の2日間、むさし苑グループのデイサービスセンター天拝で「納涼祭」を開催し、約70人が夏祭りの気分に浸りました。

アクティビティーで特に人気だったのは、ヨーヨー釣りや射的といった伝統的な遊び。子どもの頃を思い出しながら、皆さん一生懸命に楽しんでいました。

また、おいしい食べ物も納涼祭の魅力。たこ焼きやアメリカンドッグなど夏の風物詩がそろい、大変喜ばれました。

利用者さん同士の交流を深めるよい機会となり、職員一同も準備・運営・片付けに楽しい日々を過ごせました。

（特養むさし苑　済生記者　岸川涼二）

〈山形〉特養ながまち荘
新調理システム導入で食事の質の向上を追求

当施設の厨房に「ニュークックチルシステム」を導入してから約2年が経過しました。

同システムは、加熱調理した料理をチルド状態（0～3度）に冷却したまま盛り付けし、食事を提供する前に再加熱を行なうというもの。温かい料理はより冷たい状態での提供が可能です。

介護食は安定した形態で栄養価も以前より高くなり、入居者さんの喫食率が上がりました。

また、利用者71人を対象に嗜好調査を実施したところ、「温度」については約9割、「満足度」については約8割が「満足」と回答しました。

厨房内の作業の平準化により衛生的かつ計画的な作業工程も実現。ニュークックチルシステムはランニングコストの削減にもつながっています。

（管理栄養士　佐藤美幸）

抽選で5人にプレゼント！

いまいみささんの新作「ハロウィンおりがみセット」（トーヨー社）を抽選で5人にプレゼントします！

ハロウィン城のアーチや魔女やかぼちゃ、ドラキュラ、フランケンシュタイン、おばけなど10作品の作り方、おりがみ、シールがセットになって、部屋に飾って楽しめます。以下の二次元バーコードからご応募ください。

申し込みは9月末まで。当選は発送をもってかえさせていただきます。

topicS

〈山口〉豊浦病院
支援学校から実習受け入れ

7月10日から18日まで、豊浦総合支援学校高等部の3年生1人を実習生として受け入れました。本実習では生徒の「生活自立」と「社会自立」を二つの柱とし、自立へ向けたサポートを行ないます。

病棟での環境整備をはじめ、車椅子移送、食事の配膳・下膳、配茶、パソコンの入力作業やシュレッダー業務等を行なってもらい、黙々と真面目に作業する姿が印象的でした。「普段使わないパソコンでの入力作業が楽しかった」と言うように、パソコンでの食事量の入力も日に日に速くなっていきました。

この間、梅雨で電車が不通となるトラブルもありましたが、ご家族の協力で1日も休むことなく実習を終えることができました。

（済生記者　西田千鶴）

〈兵庫〉特養ふじの里
「家に帰りたい」胸の内をのぞかせる願いごと

6月29日、利用者さん有志7人と七夕の短冊を作りました。施設を利用するすべての人に願いごとを書いてもらい、笹を描いた手製のポスターに貼り付けていきました。

願いごとはいろいろありましたが、多かったのは「ずっと元気でいたい！」「おいしいものを食べたい」「家に帰りたい」でした。当施設で楽しく過ごしている利用者さんも、本当は自宅で過ごしたいという気持ちでいることに改めて気づかされました。

7月5日には夏らしい食事を提供しました。皆さんおいしそうにそうめんをすすり、いなり寿司を頬張っていました。少しでも夏の季節を感じてもらえたらうれしいです。

（東館介護課　介護福祉士　二本柳　卓）

〈新潟〉特養長和園
万が一に備えてAED・心肺蘇生研修

7月16・18日、当園防災委員会が企画したAED研修会を実施しました。当園では新潟県三条消防本部の職員を講師に招き、心肺蘇生訓練用の人形やAED機器を使って心肺蘇生法とAED使用方法の研修を行なっています。

今回は33人の職員が参加。消防隊の方からは「救急隊が到着するまでの間、少しでも生存率が上がるように心肺蘇生の継続とAEDの使用がとても重要」との説明を受けました。

他にも止血方法や、のどに食べ物が詰まった際の対処方法を学びました。万が一のときに焦らず救命活動ができるよう、定期的に研修を受けることがとても大切だと実感しました。

（済生記者　布施優子）

NSTの活動が日本病院学会で優秀演題に
〈三重〉松阪総合病院

第74回日本病院学会が7月4・5日、三重県津市で開催されました。地元開催ということもあり、当院から医師や看護師など多職種23人が参加し9演題の発表を行ないました。

筆者は仙台で開催された昨年の学会で「急性期病院におけるNSTの役割～20年の振り返り～」という演題発表を行ない、優秀演題に選出。その表彰が今回の学会総会で行なわれました。

入職時からNST（栄養サポートチーム）で活動し20年間さまざまなことを学び、経験しました。それは清水敦哉院長の指導と医師、看護師、薬剤師、管理栄養士など多くのメンバーの協力があってこそ。患者さんやチーム、病院のために、各職種が協力して活動してきたことがこのような形で評価してもらえたことをうれしく思います。

（管理栄養課　松本由紀）

福井県済生会病院
交通安全週間 横断歩道は歩行者優先！

夏の全国交通安全運動に合わせ、7月12日から19日まで、当院の榮修一警備主任が正面玄関前の横断歩道に立ち、通勤時間帯に行き交う車両や職員、地域住民に安全を呼びかけました。

榮主任は「交通ルールを守り、安全運転を心がけましょう」と声をかけ、特に横断歩道での「歩行者優先」の重要性を強調しました。「病院の近くには高齢者もいらっしゃいますので、ドライバーの皆さんは歩行者優先を念頭に置いて運転してほしい」と榮主任。

当院では今後も、交通安全の啓発活動を継続して行なっていく予定です。

（総務・企画課　山村健太）

topicS

静岡済生会総合病院
患者さんに癒やしのひとときを

8月5日、シンガーソングライターのyosuさんを迎え、当院1階で「ピアノ弾き語りコンサート」を開催しました。

「不安を抱えた患者さんや付き添いのご家族に、少しでもほっとする時間を贈りたい」というyosuさんの思いから実現したコンサート。すてきな歌声に、外来患者さんや職員など約100人が足を止め聞き入りました。「少年時代（井上陽水）」「たしかなこと（小田和正）」「パブリカ（Foorin）」など誰もが知っている楽曲のカバーや、家族の闘病経験をもとに作ったオリジナルソングなど計9曲を演奏。参加者は「歌声に癒やされた」「心地よい時間を過ごすことができた」などと話していました。

（済生記者　酒井あい）

〈大分〉日田病院
ユネスコ無形文化遺産の日田祇園祭で曳き手担う

7月20・21日に日田市で日田祇園祭が開催され、当院の8人が曳き手・囃子方として参加しました。

本来ならば1週前の7月14日に9基の山鉾が一斉に集まる集団顔見世が行なわれる予定でしたが、雨で中止に。しかし祭典当日は快晴に恵まれ、祇園囃子とともに山鉾が町内を巡行。疾病や風水害を払い安泰を祈願しました。

近年は曳き手不足に悩まされており、昨年から事前の申し込みで市外の方でも祭りに参加できる取り組みを始めています。ユネスコ無形文化遺産にも登録をされている日田祇園。参加をしてみたい方がいたらぜひ申し込んでみてください！

（総務課　鷹野勇介）

〈滋賀〉特養淡海荘
目指せパラリンピック!?「ボッチャ」で熱い戦い

当荘では地域サロンを開催していますが、7月29日は滋賀県済生会看護専門学校の体育館で、パラリンピックでおなじみのスポーツ「ボッチャ」に挑戦しました。

ボッチャは年齢、性別、障害のあるなしにかかわらず、すべての人が一緒に競い合えるスポーツです。競技ルールは簡単で、目印となる白い球を目標に赤・青の球を投げ、近い方が得点となります。参加した19人は一心不乱に投げ合い、目印の近くまで球が転がると歓声を上げ、互いに拍手で讃え合いました。

競技を終えた後は「とても面白かった。またやりたいわ」と大好評。これからも定期的に開催したいと思います。

（介護主任　宮下達也）

〈滋賀〉老健ケアポート栗東
星空へ願いを込めて入所者さんと七夕祭り

7月7日、認知症専門棟で七夕行事を開催し、入所者さん42人全員が願いを込めて書いた短冊をホールに飾りました。

「健康になりたい」「足が良くなりますように」と身体の願いごとを記した人もいれば、「お寿司が食べたい」「家族が幸せになりますように」と心温まる願いごとを記している人も。短冊を飾ることで施設内は温かな雰囲気に包まれました。

また、職員も一緒に短冊を飾ることで、コミュニケーションを深めるよい機会となりました。

（介護福祉士　向井　翼）

〈愛媛〉小田老健ふじの園
パリオリンピックを手製の国旗で応援

4年に1度の祭典・オリンピック。当施設では7月20日に入所者さん5人と職員3人で各国の国旗を作り、連日、愛媛から遠いパリの地にエールを送りました。

愛媛県からも何人かの選手が出場しました。松山市出身の松山英樹選手（ゴルフ）は銅メダルを獲得。頑張る姿に元気と勇気をもらいました。

入所者さんにはバレーボール経験者が多いようで、バレーの放送がある日は「日本頑張れ～!!」「ようボールを拾うなあ」とテレビの前で熱心に応援していました。男女ともメダル獲得とはなりませんでしたが、選手たちは輝いていました。

次は4年後。また皆で一緒に応援しましょう。

（済生記者　岡田理沙）

〈茨城〉龍ケ崎済生会病院
潮来トライアスロン大会前日にBLS研修

7月14日に開催された水郷潮来トライアスロン大会に、茨城県トライアスロン協会理事でチーフドクターを務める当院の渡邊保彦整形外科部長をはじめ、看護師と救急救命士が今年も救護班として参加しました。

運動時は心臓突然死のリスクが安静時と比べて17倍も高く、救命は一刻を争います。そこで渡邊部長の提案により、大会前日、運営スタッフ約10人に対し嶋田勇一救急救命士がBLS（一次救命処置）研修を実施。ペースメーカー装着者へのAEDのパッドの貼り方も具体的に学びました。

渡邊部長は「スポーツでの突然死は是が非でも回避したい。誰もが一次救命処置を迅速にできる環境が必要で、広く救命研修が行なわれることは大切です」と語りました。

（済生記者　堀越琴美）

〈岩手〉北上済生会病院
高齢者に大人気！「まちの保健室」に行列

北上市が主体となって実施している「まちの保健室」に、当院も毎月リハビリスタッフを派遣しています。5月27日には当院作業療法士が健康講座「首・肩の痛みのセルフケア」を行ない、約30人が参加しました。

「まちの保健室」は新型コロナによる高齢者の閉じこもりやフレイルを防ぐことを目的に、令和4年度に開始。現在も誰でも気軽に参加できる場として週1回開催され、医療・保健・介護の従事者が講師となって総合的に高齢者の介護予防を推進しています。

参加者のもう一つの楽しみは相談会の時間。専門職、しかも笑顔の素敵なイケメン講師に直接相談できるとあって、皆さん列を成して自分の順番を待っています。

（済生記者　掛川千恵子）

topicS

〈山形〉特養愛日荘
愛らんど健康講座

愛らんど地域包括支援センターは、7月25日に今年度初の「愛らんど健康講座」を開催しました。

今回はより多くの地域住民に興味を持ってもらえる内容にしたいと考え、民間企業の岡崎医療の協力のもと、山形交響楽団によるミニアンサンブルコンサートと健康のための薬と栄養の講話を企画。

生演奏で聞く素敵な音楽と、管理栄養士による健康に役立つ話や簡単にできるエクササイズで、心も身体も充実した時間となりました。当日は受講者・スタッフ含め50人ほどが参加。定員を超える申し込みがあり、幸先の良いスタートとなりました。

今年度の講座は5回の開催を予定しています。

（副主任保健師　冨士尚美）

〈三重〉松阪総合病院
受診者・スタッフ全員女性リラックス気分で健診を

当院の健診センターあさひで7月27日、今年度1回目の「レディースデイ」を実施しました。

今年で3年目を迎えたレディースデイは、受診者が女性限定なのはもちろんのこと、医師、看護師、技師、事務員に至るまですべての健診スタッフを女性で構成しています。

この日の受診者は32人。子宮がん検診や乳がん検診が多く待ち時間が心配されましたが、各部門で声をかけ合い調整し、大きなトラブルもなくスムーズに終了しました。診察室は女性医師ばかりのためかリラックスした雰囲気で、時には笑い声も聞こえてくるなど、ほっこりする場面も何度かありました。

（健診センター　西園里美）

topicS

〈滋賀〉老健ケアポート栗東
自分で削って作るかき氷 今年はとろみ付きも

8月5日からの1週間、通所リハビリテーションの利用者さん110人を対象に「自分で削って作るかき氷」イベントを実施しました。

毎年恒例のかき氷作りは通所リハビリの夏の風物詩となっていますが、水分摂取にとろみ剤を使う必要がある人はこれまで参加できませんでした。今年は言語聴覚士の協力もあり、あらかじめとろみの付いた水を凍らせてから削ることで、嚥下に心配のある人も安心して参加できるようにしました。

とろみ付きのかき氷はフワフワしており、口の中で溶けた後もとろみ剤のおかげで長く口腔内にとどまり、しっかり味わえるというメリットも。氷の冷たさにびっくりしながらも喜んで食べてもらうことができ、試行錯誤した甲斐がありました。

（介護福祉士　青木裕未）

市消防局救急隊との連携を深める症例検討会

和歌山病院

7月25日、第3回和歌山市消防局・症例検討会を当院で開催し、市消防局救急隊から36人、当院から15人ほど出席しました。

市消防局は、当院に救急搬送された症例を挙げて「糖尿病をもつ傷病者の意識障害について」をテーマに発表。当院は「意識障害と糖尿病」（英肇・統括副院長）「消化器救急疾患」（川口雅功・消化器内科部長）「MCに関する消防と医療のより良い関係の構築を目指して」（保脇佳奈恵・救急看護認定看護師）の3題を発表し、活発な意見交換が行なわれました。

当院は、昨年も和歌山市の救急のみで年間2195台の救急車を受け入れました。市消防局との症例検討会を今後も継続実施して連携を深め、今年度も年間2000台以上の救急車受け入れを達成できるよう日々の業務に取り組んでいきます。

（済生記者　松元靖寿）

外国人NAに向けたフォローアップ研修

〈東京〉中央病院

7月30日、当院に勤務する外国籍ナーシングアシスタント（NA）を対象にフォローアップ研修を実施し、4人（出身はネパールが2人、スリランカとアルゼンチンが各1人）が参加しました。

本研修は、今年3月までスウェーデンで医師として勤務していた救急診療科の入野志保医師が提案。自身の海外経験から、当院で働く外国籍NAに日本での生活や医療現場で働く上での苦労などを聞いてフォローする機会をつくろうと、看護部に企画を持ち込んで実現しました。

研修会前半は感染制御センターの師長による手指消毒の実践研修と、入野医師によるBLS（一次救命処置）研修。後半は場所を移して茶話会を実施。和やかな雰囲気で研修を終えました。

入野医師は今回参加できなかった7人のNAに向けた第2回の開催を計画しています。

（広報室　佐藤弘恵）

「感染症対応室」の運用開始

富山病院

昨秋から建設を進めてきた感染症対応室が今春完成し、6月1日から運用を開始しました。

感染症対応室は、新型コロナのような新興感染症や再興感染症の発生・まん延時に、速やかに対応するためのものです。診察室には陰圧装置を設置しており、ウイルス等で汚染の可能性がある空気を室外に逃しません。また、屋外への換気にも万全を期し、ウイルスをキャッチする高性能なHEPAフィルターできれいにした空気を排出することで感染症の拡大を防ぐことができます。

その他、感染症対応室内にトイレを設置。感染症疑いの患者さんが病院内のトイレを使うことがなくなり、一般の患者さんとの接触を避けられます。

なお、感染症対応室の新設に際しては昨年6～7月にクラウドファンディングを行ない、多くの方の支援を得て完成・運用に至りました。

（済生記者　浅野由紀）

topicS

〈山形〉はやぶさ保育園
スイカ割りにチャレンジ！

7月31日、5歳児19人と4歳児23人がスイカ割りを楽しみました。初めてスイカ割りをする子が多く、緊張した面持ちの子もいれば、興味津々で参加する子も。クラスの友だちと協力しながら挑戦しました。

硬さの違う棒が数本ある中、自分で考えて選んだ棒でチャレンジ。目隠しして、友だちに「右！　左！」と方向を教えてもらいながら力いっぱいに棒を振ります。見事にスイカが割れた時には全員でハイタッチをして大喜びの子どもたちでした。

その後、「うまい！」「またやりたい！」など盛り上がりながら、皆で割ったスイカを外で食べました。スイカが苦手な子も食べることができ、やはり自分で割ったスイカは一味違ったようです。赤い部分がなくなるくらいまで頬張る姿が多く見られました。（済生記者　齋藤里奈）

〈大阪〉中津病院
院外報リニューアル持ち帰ってもらう工夫も

年に4回発行している院外報「IkiIkiNakatsu」を、リニューアルしました。

院外報は外来の各フロアの待合室付近に置いており、主に患者さんに読んでもらう冊子です。また、病診連携室から地域連携の各クリニックにも発送しています。

7月末に発行した号から、表紙は季節感あふれるデザインに。サイズも持ち帰りやすいようにA4からB5に変更しました。

今後も、来院した人が手にとって読みたいと思ってもらえるように工夫し、内容も充実させ、コレクションしたくなるような院外報を制作していきます。

（済生記者　鈴木亜希乃）

滋賀県病院
救急災害医療済生会フェア800人が救急活動を学ぶ

6月16日、栗東芸術文化会館さきらで「ドクターカーで命を救う秘密を学ぼう！　救急災害医療済生会フェア」を湖南広域消防局中消防署と共催しました。

屋外のシンボル広場では、ドクターカーと消防車両の展示や病院・消防各種ユニホームの試着体験、救急バックの重さ体験、煙体験、水消火器での的当て体験を実施。また、屋内の大ホールでは心肺蘇生体験、能登半島地震活動記録展示、市民公開講座を開催しました。

暑い中約800人の参加者でにぎわい、特に中消防署と当院ドクターカースタッフによる「救急活動デモンストレーション」は人だかりができるほどの盛況でした。

当日の模様は、6月17日の京都新聞・同社ホームページに掲載されました。

（済生記者　有馬真由美）

〈愛媛〉松山病院
済生丸がつなぐ島民との交流

7月9日から11日までの3日間、第2次宇和海合同診療を行ないました。幹事病院の当院のほか、今治病院、西条病院の医師・看護師・コメディカルなど総勢33人のスタッフが参加。宇和海に浮かぶ日振島、竹ヶ島、戸島、嘉島の4島を済生丸で巡り、学校や公民館、済生丸船内で延べ131人の検査・診察等を行ないました。

猛暑や大雨であいにくの天気でしたが、はつらつとした島民の皆さんに元気をいただきました。筆者が担当した栄養指導では、整形外科の診療があったこともあり骨粗鬆症についての指導がほとんどでしたが、牛乳や乳製品を毎日摂取している人が予想以上に多く驚きました。「来年も元気に来んといかんね」と、笑顔で帰る島民の姿がとても印象的でした。

（管理栄養士　東田里穂）

静岡市心身障害者ケアセンター
みんなにやさしいまちってどんなまち？

8月2日と9日の2日間、静岡市社会福祉協議会が主催した「夏休みボランティア・福祉体験」に5人の小学生が参加しました。

1日目は、当センターの前田知代子施設長が障害者の特性やケアセンターの役割について話しました。2日目は当センターの利用者さんの協力のもと、会場の城東保健福祉エリア・保健福祉複合棟の中と外を一緒に散策。歩行器での移動で便利なところや危険な場所、困ることなどを探りました。

小学生からの「歩行器で歩くときに大変なことは何ですか」との質問に、利用者さんは「床がつるっとしている館内と違い、屋外でコンクリートがタイルのように区切られているところは、歩行器を毎回持ち上げる必要があり大変」と話しました。

（済生記者　西野正美）

topicS

〈北海道〉小樽病院
ミッキーマウスの山車で暑さに負けずわっしょい！

8月2日、院内保育所「なでしこキッズクラブ」恒例の夏祭りを開催しました。子どもたち27人はおみこし、山車、バギーの各チームで病院のまわりを一周しました。

今年の山車はミッキーマウス。30度近い熱気の中、「出発します」の先生の号令に、浴衣や甚平でばっちり決めた園児たちは「オー！」と威勢良く出立。「わっしょい！　わっしょい！」と暑さに負けず元気いっぱいで、見守る父母や外来患者さんたちも「がんばれ！　がんばれ！」と目を細めていました。

コロナ前までは病棟を練り歩いて入院患者さんにもお祭り気分を届けていたのですが、今回も院外開催になってしまったのが残念。それでも戻ってきた子どもたちは、保育所内でヨーヨーすくいなどをして最後までお祭りの雰囲気を楽しみました。

（済生記者　定　淳志）

〈東京〉中央病院
救命病棟の看護師を1日密着取材

マイナビが運営するYouTube「看護師チャンネル【シゴトLive】」で公開するため、7月25日、救命専用病棟の救急看護認定看護師・富田万喜子さんの1日密着取材が行なわれました。

普段の仕事風景を中心に、同日開催された認定看護師部会の様子を撮影。富田さんが能登半島地震の際に隊員として出動したDMATのこと、仕事に対する考えやプライベートでのリフレッシュ法などについて話すインタビューシーンもありました。

そのほか、救急診療科の武部元次郎医師や薬剤師の穂積利彦さん、救命専用病棟の田邊一正師長などが、多職種から見た富田さんの人柄や仕事ぶりについて語っています。

〈兵庫〉特養ふじの里
リラックススペースでもっとのびのびと！

5月24日、済生会ハーモニーにリラックススペースを設置しました。神戸ヤクルト販売歳末たすけあい運動協賛寄付金の助成により、クッションブロックやマットを購入して憩いの場が完成しました。

自力で立つ、歩くという動作ができない人や車椅子の人でも、リラックススペースの上では自分の意のままにごろごろと思いっきり動き回ることができます。また、在宅に近いスタイルでリラックスするには最適です。

設置当初は意外なことに利用者さんも戸惑っていましたが、今では待ち遠しいあまりリラックススペースを指差して「座りたい！」と意思表示し、移動したら「ふぅ」と一息。心地いい空間で笑顔になっています。

（済生会ハーモニー　副主任サービス管理責任者　鳥居信彦）

今回の動画撮影が、当院のリクルートや認知度向上につながることを期待しています。

（済生記者　鈴木香純）

和歌山病院
肝臓病教室に66人

5月18日、イオンモール和歌山で「肝臓病教室市民公開講座」を開催しました。今年のテーマは、MASLD（脂肪性肝炎）・肝硬変、肝がん、リハビリテーション、食事療法です。

当日は、消化器内科部長・川口雅功医師の「肝臓病の最近の話題～MASLD（マッスルド：脂肪性肝炎）・肝硬変・肝がんについて」、理学療法士・辻真実さんの「健康体操・肝臓にいい運動」、栄養管理士・谷山優佳さんの「肝臓の食事療法について」の三つの講演を行ない、その後、医師による無料健康相談や血圧・体脂肪測定会などを実施しました。

昨年を上回る66人が参加。「新しい治療や肝臓の成り立ちなど、とても勉強になった」「治療法が増えていることが分かり安心した」など多くのうれしい言葉をいただきました。

（済生記者　松元靖寿）

〈大阪〉吹田病院
小児科の取り組みが企業リーフレットに掲載

ファイザー株式会社のリーフレットに、小児患者に対する成長ホルモン製剤を用いた治療の取り組みが紹介されました。

成長ホルモン製剤を用いた治療では患者さん本人や保護者が自己注射を行なうため、不安を感じる患者さんも多く、医師や看護師などによるきめ細かなサポートが重要となります。

リーフレットには医師と看護師が連携して行なう痛み軽減のアドバイスや、不安な気持ちへの寄り添い方、投薬効果をモチベーションにつなげる方法など、当院での自己注射指導や院内連携の取り組みが詳細に記載されています。

ファイザー社が一病院を取り上げてリーフレットを作成したのは初めてのこと。6月下旬に配布され、全国の病院や施設で薬剤を提供する際の参考資料として使用されています。

（総務課　中川祐紀）

topicS

5年ぶりの力士慰問に患者さん大感激

愛知県済生会リハビリテーション病院

名古屋場所を前にした7月9日、5年ぶりに伊勢ノ海部屋力士の慰問があり、錦木関と関王さんが来院しました。

当院にとって、伊勢ノ海部屋力士の慰問は初夏の恒例行事の一つでした。しかし、コロナ禍により2019年7月を最後に中止。昨年、コロナが5類感染症に移行したことで再開することができました。

患者さんと職員が大きな歓声と拍手で迎える中、2人の力士は1階リハビリ室と各病棟に足を運び、約60人の患者さん一人ひとりに声をかけてくれました。

患者さんは間近で見る力士の体の大きさにびっくりしながら、一緒に写真撮影したり、握手したりと力士との交流をとても喜んでいました。

（総務課　主事　熊本佳奈）

〈神奈川〉横浜市南部病院

医療チーム交流イベント活動周知へ議論を交わす

チーム医療の活性化に向けた今年度第1弾の取り組みとして、8月8日、医療チーム交流イベントを院内で開催しました。

昨年度に引き続いての開催で、今年度は新たに「乳がん対策チーム」と「気になる妊婦連絡会」が参加。全13チームから多職種が計22人集まりました。

今回は昨年度の活動報告会での「チームに相談したい時、誰に連絡すればいいの？」という意見を受けて、院内の皆さんに各チームの活動内容を知ってもらい、連絡しやすくするための方法を検討。チーム混合のグループに分かれて話し合い、さまざまなアイデアが発表されました。

第2弾は、12月に活動報告会を予定。その発表順を決めるくじ引きを行なった際には各チーム気合十分で、一番盛り上がる時間となりました。

（キャリア支援室長　嶋中ますみ）

岡山済生会総合病院

関節痛がテーマの市民健康セミナーに82人

7月20日、当院さいゆうホールで「関節が痛い？何かの病気でしょうか」をテーマに市民健康セミナーを開催し、当院の4人が登壇しました。

はじめに、肝臓内科の池田房雄診療部長が関節痛を引き起こしうる疾患について、リウマチ・膠原病内科の上野明子診療部長が関節痛を伴う自己免疫疾患について講演を行ないました。

その後、藤原聖隆理学療法士がロコモとサルコペニアのための運動を実践指導。最後に前原友美管理栄養士が、サルコペニア予防に効果的な食事と運動について説明しました。

事前申込制にもかかわらず、当日は82人が参加。アンケートでは「良かった」の回答が85％を超えるなど好評でした。

（広報企画課　別府治恵）

福井県済生会病院

がんとの向き合い方 秋野暢子さんが特別講演

7月20日、福井県県民ホールで当院集学的がん診療センター主催の市民公開講座「人生100年！がんとの向き合い方」を開催し、市民約370人が参加しました。

第1部では、当院の専門医らが高齢者のがん治療、外科治療、薬剤治療、放射線治療に関すること、自分らしくいるために必要な緩和ケアの支援、がんと運動などについて分かりやすく解説しました。

第2部は、女優の秋野暢子さんを招いての特別講演。秋野さんは、がんと診断されたときの心境、主体的に治療に取り組むこと、そして人生を笑って楽しむ大切さを話しました。

秋野さんとの対談で笠原善郎院長は「患者さんの立場になって考え、よりよい治療や、その先の人生を選択するサポートをしていきたい」と結びました。

（済生記者　田中一弥）

〈福岡〉二日市病院
もっと医療に興味を職場体験の生徒受け入れ

地元中学校2校の生徒が7月2日と、3・4日の日程で職場体験を行ないました。

各校4人の計8人が参加し、1校目は看護師、医師、臨床工学技士、薬剤師の仕事を体験。2校目は2日間の日程で、1日目は1校目と同じ職種を、2日目は看護師（2回目）、臨床検査技師、診療放射線技師、リハビリテーションの仕事を体験しました。できる限り病院のさまざまな仕事を体験し、興味を持ってもらえるように担当職員が話し合って企画しました。

「病院ではどんな職業の人が働いていると思いますか」という職員からの問いに対し、生徒のほとんどが医師と看護師と回答。1人の患者さんに多職種で治療にあたっていることを知って驚く生徒もいました。これを機に医療にもっと興味を持ってもらいたいと思います。

（済生記者　久冨大史）

〈愛媛〉西条病院
地元高校生44人が職場体験

今年も職場体験として県立西条高校から44人を受け入れ、8月5日から3日間、病院の業務を経験してもらいました。医療に興味を持つ学生の地元での活躍を願い、今年は例年より多くの学生を受け入れました。

オリエンテーションでは、済生会の歴史や成り立ちや、当院の地域に根差した取り組みなどについて説明。続いて、希望職種に分かれて専門的な実習を行ないました。

終了後は「多職種で協力しながら一つの病気を治療していた」「スタッフの皆さんが患者に寄り添っていた」「将来、看護師になりたいです」など多くの感想をもらいました。

（総務課　大仲　均）

〈新潟〉三条病院
1日看護師体験でバイタル測定に挑戦

7月30日、高校生を対象に「1日看護師体験」を行ない、6人の生徒が参加しました。

午前は座学での接遇研修と感染対策研修を受けた後、病院内ツアーで多職種の仕事を見学しました。午後からは看護体験として参加者同士バイタルサインを測定し、電子カルテへの入力に挑戦。戸惑いながらも皆さん上手に測定していました。

最後は、1日の振り返りを含め、若手看護師との意見交換会。高校生の「なぜこの病院を選んだのですか」との質問に、若手看護師は「地域に根差した看護を学びたいと思い、地域包括ケア病棟がある三条病院を選んだ」と答えていました。

短い時間でしたが、看護や医療により一層の関心を持っていただけたようです。

（済生記者　樋口拓也）

山口総合病院
ふれあい看護体験に21人看護の道を志すきっかけに

7月23・24日の2日間、ふれあい看護体験を実施し、高校生21人が参加しました。病棟での看護師の日常業務を体験しても

らい、さらに多職種の業務の見学、現役看護師との懇親会を通じて、看護の魅力ややりがいを伝えました。

参加した高校生は「将来、医療従事者として働きたいという思いが強くなりました」「病棟の雰囲気を肌で感じ、テキパキ働く看護師をかっこいいと思いました」などポジティブな感想を述べました。

少子化が進む現在、看護職の確保がますます難しくなっていますが、イベントを通して未来の看護師育成に貢献できたと思います。

（副看護部長　松井みとみ）

〈大阪〉野江病院
医療への理解を深める職場インタビュー

7月12日、大阪府立芦間高校（守口市）の1年生4人が授業の一環で来院し、当院の看護師2人と助産師1人に職業に関するインタビューを行ないました。

「看護師を目指したきっかけは」「他の職種との連携はありますか」などの質問に答えること30分ほどでしたが、あっという間に時間が過ぎていきました。生徒たちは緊張しつつも時折笑顔が見られ、和やかな雰囲気でのインタビューとなりました。

後日、郵送でいただいたお礼の手紙には「医療の世界について理解が深まった」「想像していたよりいろいろな仕事をしていて本当にすごいと思った」などの感想がありました。

（済生記者　坂本千晶）

〈埼玉〉川口総合病院
“生きることを支えていく”看護の仕事を体験

7月30日と8月6日、高校生を対象にふれあい看護体験を実施し、計12人が参加しました。

生徒たちはスクラブに着替えると、各病棟で先輩看護師と一緒に患者さんの清潔ケアや散歩などを体験。患者さんたちもうれしそうに「うちの孫も看護師を目指しているよ」「がんばってね」などと話しかけていました。

看護師を目指すきっかけを聞くと「家族のお見舞い」や「幼少期に入院した経験」などさまざま。「電車内で急病人手当をたまたまその場にいた看護師さんと行ない、その俊敏な行動を見てなりたいと思った」と話してくれた生徒もいました。

名古屋恵子看護部長は「看護としてできることに限界はありません。看護は生きることを支えていく仕事。学校を卒業して職業を選ぶ際に、ぜひ当院を思い出してもらえたらうれしい」とエールを送りました。

（済生記者　原　衣里奈）

ダヴィンチを見てみたい！外科医志望の高校生が来院

〈群馬〉前橋病院

8月7日、将来外科医を目指す県内の高校2年の男子生徒が来院し、手術支援ロボット「ダヴィンチ」を見学しました。

男子生徒はインターネットで当院にダヴィンチが導入されているのを知ったとのこと。学校を通じての見学依頼があり、受け入れました。

当日は、臨床工学技士、研修医、外科医らスタッフが案内。ダヴィンチのシミュレーター操作を行なったり、実際の手術を見学したりして、5時間ほど滞在しました。最後に研修医に、大学進学や勉強への心得などをアドバイスしてもらっていました。

来院時の緊張した表情とは一変し「勉強になった。楽しかった」ととても満足して帰っていったのが印象的でした。

（済生記者　川上佳代）

オープンホスピタルで学生15人が仕事体験

〈三重〉明和病院

7月27日、医療・福祉を志す学生を対象にしたオープンホスピタルを開催し、高校生や専門学生など計15人が参加しました。

昨年初開催し、今回で2回目となった当院のオープンホスピタル。当日は4グループに分かれ、看護や介護、リハビリの仕事体験、施設見学を行ないました。

看護師ブースでは模擬血管を使った注射など、介護士ブースでは車椅子の使い方やICTの活用紹介、リハビリブースではレッドコード（運動療法の器具）を使用したリハビリ体験などを実施。

参加者の一人は「祖父が入院したときによくしてもらい看護師に憧れた。注射で採血する疑似体験をして看護師の仕事のイメージが湧きました」と話していました。

（済生記者　藤岡拓人）

オープンホスピタルに33人盛りだくさんの体験企画

〈三重〉松阪総合病院

8月6日にオープンホスピタルを開催し、地域の四つの高校の3年生を中心に33人が参加しました。

鶴森立美看護部長の開催挨拶の後、生徒たちは5グループに分かれて進路相談と各種体験コーナーを回りました。

看護体験では模擬血管を使用した注射体験、内視鏡・エコーライブでは実際の医療機器を使用した実演、救急蘇生法体験では寸劇を通して人形とAEDを使った実演を行なうなど盛りだくさん。模擬手術体験ではラパ鉗子でみかんの皮むきを競うゲーム、白衣体験では「コードブルー」のスクラブを着用して写真撮影を行なうなど趣向を凝らしました。

最後は、垣本斉副院長の閉会挨拶で締めくくり、お土産にソーシャルインクルージョンの一環で支援している福祉事業所が製造する災害備蓄用パンを配布しました。

（済生記者　岩﨑貴穂）

中学生が超音波メスを！縫合を！

〈神奈川〉横浜市南部病院

8月4日、ジョンソン・エンド・ジョンソン社との共催で、中学生向けの外科医体験「ブラックジャックセミナー」を当院で4年ぶりに開催しました。定員20人にもかかわらず120人を超える応募があり、医療業界への注目度の高さがうかがえました。

当日は中学生19人が参加。グループに分かれて、救急救命・縫合・超音波メス・内視鏡トレーニング・採血など、医学に直接触れる体験をしました。

実際の機器を使用することもあり、生徒からは「普段できないような体験で、医師になりたい気持ちが強くなった」「医師や看護師などの医療職に興味を持ちました」といった感想がありました。

（済生記者　小澤郁斗）

初めての看護体験に真剣なまなざし

〈福岡〉大牟田病院

7月17・31日の2回、高校生を対象としたふれあい看護体験会を実施し、近隣の高校から計11人が参加しました。

済生会や看護師の仕事についての講義の後、血圧測定・生体観察モニター装着体験・患者疑似体験などを行ない、終盤には施設内を見学。薬局では薬剤師の仕事、放射線科ではCTやMRIについての説明を受け、リハビリ室では外来患者さんの訓練を見学しました。

また、3月に新設した地域包括ケア病棟見学では、入院患者さんと一緒にレクリエーションに参加。病棟看護師への質問会では、自分の考えを持って多くの質問をする様子に頼もしさを感じました。

初めて見るもの・体験するものに、終始新鮮な反応を見せてくれた高校生。実際に働く現場を見て具体的なイメージができたという感想をもらいました。

（病棟看護部課長　藤吉初美）

topicS

ちょっとした工夫と配慮で皆が楽しめる夏祭りに

〈埼玉〉川口乳児院

6月21日、院内で夏祭りを行ない、約20人の子どもたちが参加しました。

朝から甚平に着替え、おもちゃのお金を持ってスタートです。ヨーヨー釣りは取りやすいように、お玉を使った「ヨーヨーすくい」にアレンジしました。

保育士手作りのガチャガチャも、小さな子どもたちでも回しやすく工夫したところ大人気で、何度も挑戦しに戻って来る子も。

医療ケアクラスの目の不自由な子も、祭り囃子（ばやし）のBGMや焼きそばを焼く匂いに、いつもと違う雰囲気を味わえたようです。

すべては子どもたちが楽しめるように——係の保育士の細かな配慮が感じられる心温まる会となりました。

（済生記者　大貫典子）

〈新潟〉なでしこぽかぽか保育園

4月開園、初めての夏祭り

7月20日、なでしこぽかぽか保育園で夏祭りを開催し、園児・ご家族を含め約30人が参加しました。

当園は今年4月に開園したばかりで、大きな行事を行なうのは今回が初めて。園児と職員で夏を感じさせるさまざまな飾りを作るなど、準備を進めてきました。

当日は、くじ引きやおもちゃの金魚すくい、輪投げ、おもちゃ作りコーナーなどの縁日や、職員によるお話シアターを設けて楽しい時間を過ごしました。

ご家族からは「とても楽しかった」「飾り付けが素晴らしかった」とうれしい言葉も。園児やご家族が笑顔で楽しんでいる姿を見ることができ、とてもすてきな夏のひとときとなりました。

（特養長和園　済生記者　布施優子）

長崎病院

済生会こども鳴滝塾で夏休み医療者講話

7月24日、当院食堂で済生会こども鳴滝塾を開催し、塾生4人が参加しました。

通常は毎週土曜日の午後に長崎大学附属図書館経済学部分館で開催していますが、学習習慣の定着と学力向上を目指し、夏休みを利用して学習日の追加を企画。この夏休み期間のこども塾では、6回シリーズで医療者講話を学習の前に行なっています。初回は透析室の中川茜看護師が、仕事内容ややりがい、自分が看護師になるまでのことなどを話しました。

塾生からは「看護師になって大変なことは」「どのくらい勉強したら看護師になれるのか」などの質問が寄せられました。

（済生記者　平川幸子）

〈愛媛〉松山乳児保育園

苗から育てたトウモロコシ待ちに待った収穫！

8月5日、当園の裏庭で育てたトウモロコシの収穫を行ないました。4月に初めて苗を植え、子どもたちと「大きくなあれ、大きくなあれ」と大事に水やりをしてきたものです。

収穫したトウモロコシは、給食の先生のところへ持って行きゆでてもらい、ぞう組園児20人で分けて食べました。

今年は他にも、プランターでキュウリやピーマン、スイカを植えました。水やりをして大事に育て、できたものを収穫して食べる——。こうした経験を通して、植物を大事にすることや感謝すること、収穫することの喜び、また育てていると虫に食べられてしまうこともあるなど、食育の一つとしていろいろな体験ができました。

（済生記者　宮内亜希子）

〈神奈川〉横浜市東部病院

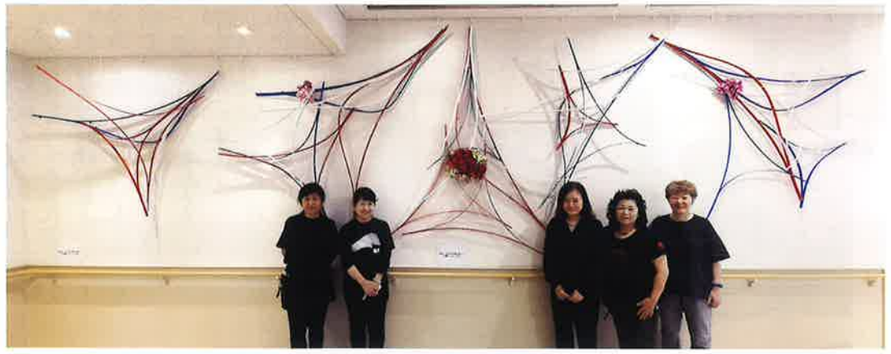
パリオリンピックをテーマにいけばな作品を展示

パリオリンピック開幕に合わせて、7月26日から当院3階多目的ホール前ギャラリーで記念作品を展示しています。

タイトルは「パリオリンピック」。いけばな草月流の有志「F.M.U. Flower Meet You ～あなたに寄り添う花～」の皆さんが制作してくれました。

青・白・赤のトリコロールカラーに塗られた竹が組み合わされた姿はエッフェル塔のようです。そして、中央部分と左右の飾りはご覧の通り、パリ・ベルサイユを象徴する「バラ」。中央にある赤と金が豪華で目を引きます。中央と左右に飾られているバラはそれぞれリボンで作られているそうです。

（済生記者　荒木愛美）



topicS

〈滋賀〉守山市民病院
福祉車両2台の寄贈

相原満雄さんから車椅子の乗り降りが可能な福祉車両2台の寄贈があり、7月30日に贈呈式が行なわれました。

事業を行ないながら地域への社会貢献活動にも積極的に取り組んでいる相原さん。贈呈式では「地域の病院として期待している」と激励の言葉をいただきました。

最近は退院前後の訪問指導など公用車の使用頻度が増え、予約がいっぱいになることもありました。また、既存の福祉車両にはカーナビがなく、訪問時に道に迷う不安もありました。今回寄贈された車両にはカーナビもドライブレコーダーもついており、職員の期待も大きく膨らんでいます。

（済生記者　中嶋元香）

〈福岡〉特養むさし苑
なでしこルーム初満席!!

イオンモール筑紫野に設置した「なでしこルーム」で、7月17日に「介護保険制度をうまく活用しよう!」をテーマに講話を行ないました。講師は大野城市南地区地域包括支援センターの埋金けい子・主任介護支援専門員です。

「なでしこルーム」は令和4年12月に開設し、月1回、二日市病院と協働して健康・福祉・介護に関する情報発信や相談などを担当分野ごとに持ち回りで実施しています。

今年度第1回は「認知症との関わり方」をテーマに講話を行ない来場者は2人だったので、今回は3人以上を目標に掲げ、チラシを公民館や市役所に配布するなど広報に努めました。その結果、定員いっぱいの6人が来場。今年4月の相談会から講話スタイルに変更した成果が出ました。

（済生記者　岸川涼二）

熊本県地域生活定着支援センター
それ、熱中症になるかも？リーフレットで注意喚起

7月から8月にかけて、当センターで支援している単身生活者20人ほどを対象に、熱中症に関する正しい知識を記載したリーフレットとともに塩飴や塩分タブレットなどを配布しました。

支援している人の中には、どんなに暑くても電気代節約のために扇風機だけで耐えしのぐ人も。また、冷房のつもりで暖房をつけている人、水分補給のつもりでお酒を飲む人などさまざまな人がいます。

リーフレットを受け取った人からは「いつもありがとうございます」と感謝の言葉が。一度の声かけだけで考えを変えるのは難しいですが、熱中症を意識するきっかけになってくれたらうれしく思います。

（相談員　西村悠香）

第14回 済生会生活困窮者問題シンポジウム
子ども支援フォーラム

令和6年
10/12（土）

▲申し込みはこちら
（締切：9月28日）

開催時間
13：00～16：00（受付12：00～）

会　場　**春日部市民文化会館（小ホール）**

定　員　**400名**　入場無料

講演会

基調講演

壊されゆく子どもたち
―今私たちにできること、しなければならないこと―

講師
水谷青少年問題研究所　所長
水谷　修 氏

プロフィール

1956年、横浜に生まれる。少年期を山形にて過ごす。

上智大学文学部哲学科卒業。横浜市にて、長く高校教員として勤務。12年間を定時制高校で過ごす。

教員生活のほとんどの時期、生徒指導を担当し、中・高校生の非行・薬物汚染・心の問題に関わり、生徒の更生と、非行防止、薬物汚染の拡大の予防のための活動を精力的に行なっている。

また、若者たちから「夜回り」と呼ばれている深夜の繁華街のパトロールを通して、多くの若者たちとふれあい、彼らの非行防止と更生に取り組んでいる。一方で、全国各地からのメールや電話による様々な子どもたちからの相談に答え、子どもたちの不登校や心の病、自殺などの問題に関わっている。

その現場での経験をもとに、専門誌や新聞、雑誌への執筆、テレビ、ラジオなどへの出演、日本各地での講演などを通して、子どもたちが今直面している様々な問題について訴えている。

シンポジウム

テーマ

子どもを取り巻く多様な問題を考える

パネリスト

- 一般社団法人彩の国総合教育研究所理事長
  畠山　清彦 氏
- ＮＰＯ法人埼玉フードパントリーネットワーク理事長
  草場　澄江 氏
- ケアリーバー（社会的養護経験者）・株式会社 LIXIL
  後藤　拓也 氏
- 社会福祉法人恩賜財団済生会支部埼玉県済生会彩光苑所長
  田嶌　襄 氏

コーディネーター

- 大分大学・大分保護区保護司会（元佐賀県済生会）
  工藤　修一 氏

主催：社会福祉法人恩賜財団済生会支部埼玉県済生会　彩光苑（問い合わせ先：048-755-2111）
後援：埼玉県、春日部市、春日部市教育委員会、春日部市社会福祉協議会、埼玉県社会福祉士会

心不全患者を支えるために病院と地域で意見交換

山口総合病院

7月18日、第49回済生会地域連携セミナーを当院で開催し、当院・地域の医療機関などから約50人が参加しました。

当日は当院の慢性心不全認定看護師・中野千秋さんが講師を務め、参加者それぞれの立ち位置から心不全患者との関わりについてディスカッションを実施。心不全療養指導士4人（畑谷恵美さん、西本真貴さん、前川寿徳さん、右田智香さん）、リハビリ専門職、MSW、地域連携看護師を中心に活発な意見交換を行なうことができました。

病院側と地域側、それぞれが求めている情報は何かが明確となり、今後効果的な情報提供を確実に行なっていくことで、さらなる連携強化につながると考えます。

（副看護部長　蔦野知代子）

〈新潟〉なでしこ青空保育園 120人が来園し盛大な七夕夏祭りに

7月6日、七夕夏祭りを開催しました。今年は保護者や小学生も含む120人が来園。浴衣や甚平姿で参加する園児も多く、にぎやかな祭りになりました。

的当てやボウリング、ヨーヨー釣り、お化け屋敷などさまざまなコーナーが設けられる中、親子で楽しむ姿がたくさん見られたのが、長和園の地域貢献活動の一つ「みんなの居場所まんなかテラス」の利用者さん手作りの的当てゲームでした。

盆踊りの時間になると子どもたちは遊戯室に集まり、手作りのおみこしを囲みながら元気よく踊って楽しい時間を過ごしました。

帰り際には、玄関に飾られている笹に願いを込めた短冊を飾ったり、写真を撮ったりして七夕の雰囲気を楽しむ親子の姿もありました。

（済生記者　桜井麻希）

topicS

木目に描くホスピタルアート

山形済生病院

7月4日から25日まで、新庄市在住の画家Hitomiさんの「木目に描くホスピタルアート展」を当院南館2階なでしこギャラリーで開催しました。

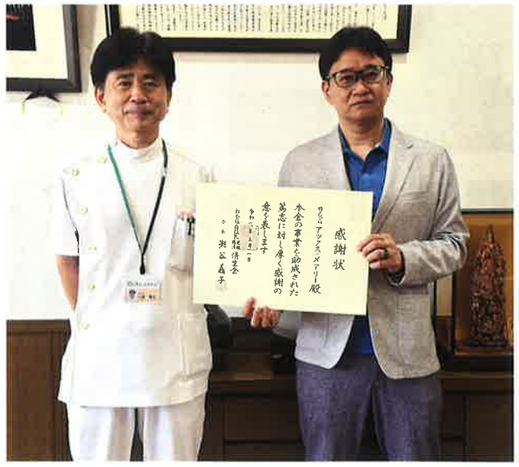
この作品展は、Hitomiさんが当院職員（石山淳一医療支援課係長）の高校時代の同級生というつながりから実現したもので、地元の新聞にも取り上げられました。

Hitomiさんの作品はスギ板に描かれており、木目を生かしながら淡い色彩で自然を表現しています。患者さんや職員からは「木に描くなんてすごいね」「きれいだね」と感嘆する声が多く、見る人に癒やしを与えていました。

（済生記者　小山結花）

〈広島〉老健はまな荘 広島愛からの寄付に感謝を

7月5日、当施設の小林博文施設長から株式会社アックス・メアリー（東京都港区）の佐藤靖代表取締役に、令和4・5年度に受納した寄付に対する感謝状を手渡しました。



当施設への寄付のきっかけは、佐藤さんのお母様が当施設に入所したことと、広島に育ててもらったので少しでも広島に関係することに支援をしたいという思いから。不動産業を営む佐藤さんは、基本的に不動産の売買や賃貸で得た利益は社員に還元しており、「不動産の相場変動で得た利益の一部を子どもの育成や社会福祉の寄付に充てている」と言います。

小林施設長は「今年度は介護報酬の改定があったものの、施設の運営は大変厳しい状況。これからもご支援をいただきたい」と御礼を述べました。

（済生記者　佐藤　聡）

topicS

富山病院
野菜足りていますか？「ベジチェック」に行列

8月2日、「栄養の日」（8月4日）にちなんで、当院エントランスホールで「お口と栄養のおいしい関係」をテーマにイベントを開催しました。

管理栄養士と歯科衛生士が協働し、口の中の健康や参加者が抱える健康の悩みに応じた栄養相談のブースを設けるとともに、健康に役立つ情報や料理のレシピを紹介しました。

今回のイベントで特に人気が高かったのは、センサーに手をかざすだけで野菜の推定摂取量が分かる「ベジチェック」です。イベントの時間中終始列ができ、70人余りが計測。思ったよりも摂取量が少ないことが判明し、「もっとたくさん野菜を食べなければ」と口にする参加者がたくさんいました。

（済生記者　浅野由紀）

〈大阪〉野江病院
七夕ふれあいコンサート

7月5日、当院1階ロビーで「第26回なでしこふれあいコンサート～七夕バージョン～」を開催し、約70人が鑑賞しました。

患者さんや地域住民に向けて年2回開催しているふれあいコンサート。今回は音楽療法活動を行なうピアニストの西山満理さん、ソプラノ歌手の石橋文恵さん、フルート奏者の大鶴華子さんが、七夕や夏にちなんだ童謡やドラマのテーマ曲を演奏しました。

当日は35度を超える猛暑日となりましたが、先生方が奏でる音楽で会場に涼しい風が吹いたようでした。アンコールで恒例の「六甲おろし」が演奏されると、手拍子で会場全体が一体に。皆さんの楽しそうな笑顔が会場にあふれました。

（済生記者　坂本千晶）

〈三重〉介護老人福祉施設 明和苑
125人参加の夏祭り「盆踊りは体が覚えている」

8月5日から9日まで、当苑デイサービスで恒例の夏祭りを開催し、延べ125人が参加しました。

この規模での開催は5年ぶりで、目玉は利用者さん参加型の盆踊り。職員が踊る盆踊りに合わせての自席での手拍子や踊りに、大いに盛り上がりました。

「最近は新型コロナの影響で祭りがなく、ずっと踊れていなかったけど、久しぶりに音頭を聞くと体が覚えていて勝手に手が動いた」と笑顔で話す利用者さん。的当て・輪投げなどのゲームもあり、それらを楽しんだ後はかき氷でクールダウンしていました。

（済生記者　藤岡拓人）

東神奈川リハビリテーション病院
大好評！専門学校生による初の院内スイーツ販売

7月24日、当院近くにある横浜スイーツ&カフェ専門学校による院内販売を初めて実施しました。

近隣に同系列の専門学校が4校あり、かねてから共同企画を検討していたところ、今回の院内販売の実施が決定。院内販売用のポスターも学生が作成し、当日は3クラス（各6人）の学生が入れ替わりで、それぞれ2種類ずつ、クッキーやフィナンシェなど計6種類のスイーツを販売しました。

お昼時の販売とあり、多くの職員が購入し、予定終了時刻前に完売。前日からスイーツを準備した学生、普段買えないスイーツを格安で購入できた職員、双方ともに大満足の催しになりました。

（事務部　医事課長　濵﨑啓師）

〈愛媛〉松山特養
夏祭りゲームで3世代交流

7月28日、特養入所者全員とショートステイ利用者さん合わせて約80人が、ユニットごとにそれぞれの共同スペースで夏祭りゲームを楽しみました。

「マツケンサンバⅡ」の音楽を流すと、法被を羽織った利用者さんはもうノリノリ。ヨーヨー釣りや輪投げに真剣な表情で取り組む人、面会に来たご家族と一緒に楽しむ人もいました。

中には「景品のお菓子を孫にプレゼントする！」と一生懸命に手を伸ばし、輪投げでお菓子をゲットする人も。「ばあちゃん、ありがとう」と、久しぶりの3世代交流の機会が生まれました。

（済生記者　畑中利恵）

topicS

地域と繋がる「まちの美術館」オープン！

神奈川県病院

7月29日から、当院1階東館と西館をつなぐ渡り廊下で「まちの美術館」と称して地域で活動している人々の作品展示を始めました。

8月の展示は、うらしま水墨会の皆さんが手がけた水墨画。人物から建物、風景まで多岐にわたる題材、多彩な表現を通じてそれぞれの作品に込められた思いや巧みさを感じることができます。

「作品一つひとつがとても素敵（すてき）で心に響きました」「院内にこのようなスペースがあると心が安らぐ」と来院者や患者さんからとても好評です。

展示期間は1カ月サイクルで考えており、今後は写真や書道などの作品展示を予定しています。

（済生記者　小山友輝）

〈静岡〉特養小鹿なでしこ苑

マスコット「なでしか」の掲出用フレームを作成

6月の済生会フェアで使用した当苑のマスコットキャラクター「なでしか」のイラストを玄関ホールにつるして飾っていたのですが、落下してしまいました。介護長から「フレームを作って飾ろう」との提案があり、7月9日、手の空いている職員

を巻き込んでフレーム作りを行ないました。

木材を枠に合わせてカットし、木工用ボンドで圧着して金具をビスで固定。あっという間に完成しました。受付カウンター横に掲示することになり、本日も

来苑者を見守っています。

「なでしか」は当苑のベストのデザインにも使われており、地域の行事や病院への付き添い等で着用するなど活躍の場を広げています。

（済生記者　石田遼祐）

〈山形〉小白川ケアセンター

クーリングシェルターはじめました

7月10日から熱中症予防を目的に、当施設1階ロビーをクーリングシェルター（指定暑熱避難施設）として地域の皆さんに開放しています。

施設理念に「施設の機能を充実するとともに地域に開放する」ことを掲げている当施設。今年は例年以上の猛暑が予想されていたことから、山形市と協議し、民間施設では珍しい「指定暑熱避難施設」として協定を結びました。

もともと病院であったためロビーは広々としています。8月13日には散歩中の高齢者が立ち寄り、「クーラーの利いたところで休ませてもらってよかった。元気になったよ」と施設を後にしました。学校帰りの子どもたちの利用も歓迎です。暑いときは皆さん無理せずここで〝ひと涼み〟していってくださいね。

（済生記者　岩城多香代）

福井県済生会病院

たくさん見つけたよ！七夕会で星に願いを

院内保育所「ぽっかぽか園」では、7月5日に26人の子どもたちと七夕会を開きました。

彦星さまと織姫さまの飾りを見せ、子どもたちに「誰かな？」と尋ねると、「パパとママ」と何ともかわいい答えが返ってきて、一気に場が和みました。

保育士による七夕のお話では、登場人物の願いごとがかなうたびにニコニコ笑顔の子どもたち。まるで自分たちの願いごとがかなったようでした。

お話を聞いた後は、皆で協力して保育室に隠されたお星さまをたくさん見つけ、壁にはキラキラ輝く天の川が完成しました。

（保育士　坪川佳代）

〈兵庫〉小規模特養なでしこ神戸
正装で祝う15周年

当施設の開設15周年を記念して、7月1日、利用者さん15人の参加のもと「15周年お祝いの会」を開催しました。

式典の雰囲気づくりのため、職員はもちろん利用者さんにも正装での参加を依頼。利用者さんはいつもとは違う表情で会に臨みました。

手作りの花や「なでしこマーク」のパネルを贈呈、永年利用者への表彰を行ないました。利用者さんを迎えに来たご家族に賞状を手渡すと、「10年以上お世話になっているんやな。これからもよろしくたのんます」と感謝の言葉が返ってきました。

利用者さんにも準備段階から参加してもらうなど、皆で一緒に作り上げた会となりました。

（サービス計画担当者　藤内貞子）

〈群馬〉前橋病院
「顔の見える連携」を16回を数えた登録医大会

7月10日、今回で16回を迎える登録医大会をホテルラシーネ新前橋で開催しました。

あいにくの天候でしたが、登録医98人、院内から60人が参加。「顔の見える連携」を合言葉に、互いの連携強化を図りました。

今回は歓談の最中に、当院の取り組みに少しでも興味を持ってもらえるように当院の公式YouTubeチャンネルを放映しました。また、近隣の病院の連携担当者も招待し、大会を見学してもらいました。

今後は他院の登録医大会を見学し、来年以降の大会をさらに良いものに改善していきたいと考えています。

（地域連携課長　福田智宏）

〈福井〉特養聖和園
正しいおむつ装着を知りより良いケアの提供を

7月24日、当園デイサービスのホールでおむつの正しい使い方を学ぶ園内研修を実施し、訪問介護職員6人が受講しました。

当日は、大王製紙が認定する「アテントマイスター・プロ」の資格を持つ当園職員が講師を担当。おむつ装着の実演を行ない、具体的な装着方法や注意点の説明をしました。受講者たちは真剣な表情で取り組み、多くの質問をしながら理解を深めました。

正しいおむつ装着は、利用者さんの快適さを保ち皮膚トラブルを防ぐためにも非常に重要です。受講者からは「訪問先でも自信を持っておむつを装着できるようになった」「より良いケアを提供する技術を習得できてうれしい」などの声がありました。

（済生記者　野尻　宗）

topicS

〈福岡〉大牟田病院
春季消防訓練に35人いざという時の行動を学ぶ

7月24日に春季消防訓練を行ない、職員35人が参加しました。

訓練は昼間勤務体制時の7階病棟浴室からの出火を想定。避難誘導時に車椅子などの患者さんは垂直移動が必要になるため、エアストレッチャーを使用した搬送訓練を実施しました。また、水消火器を使用しての消火練習や止水板の設置方法も確認。病院を守る手段を職員一人ひとりに知ってもらい、すぐに行動できるよう繰り返し訓練を行なう必要性と意義を強く感じました。

訓練に協力した大牟田消防本部の2人の隊員からは「緊急の状況でこそ声かけをしっかりと行なうことが重要」との総評がありました。

当院では消防訓練を年に2回実施。今後は勤務人数の少ない夜間帯などの訓練も行なう予定です。

（事務部　主事　新井大亮）

〈山形〉特養ながまち荘
5年ぶりに規模拡大にぎやかな夏パーティーに

7月31日、長期入所者80人、ショート利用者15人が参加して夏パーティーを開催しました。

今年は5年ぶりに規模を拡大し、職員も40人参加しました。中庭には家族会役員とボランティアによる焼き鳥や綿あめ、キンキンに冷えたジュースなどの出店が並び、「最高！」「もっと食べたい」と笑顔の利用者さん。

施設内では、職員による花笠踊りやくじ引きの出し物がありました。花笠を手渡すと一緒に踊り出す利用者さんもチラホラ。皆さんお祭りの雰囲気を全身で味わっていたようでした。

実行委員長の大場智子副主任介護員は「無事開催でき、皆さん喜んでくれてよかった。利用者さんも職員も楽しめる行事になりました」と感慨深げでした。

（済生記者　髙見友郁）

topicS

〈北海道〉小樽病院

朝野球で優勝を果たす！ 投打かみ合いコールド勝ち

7月6日、小樽朝野球春季大会の決勝戦が小樽花園グランドで行なわれ、当院チームが優勝を果たしました。

市友小樽チームとの決戦前、選手は少し緊張気味でしたが、キャプテンでムードメーカーでもある中田和希選手がチームを鼓舞し、いつものチームの雰囲気に。いざ試合が始まると重量打線が火を噴き、ホームラン1本を含む毎回の出塁。加賀潤輝投手の完投と、投打がかみ合った内容で、8対2のコールドで勝利を手にしました。

当日は5時半の開始でしたが、決勝ということもあり職員も早朝から多数応援に駆けつけ、熱い声援を送っていました。

今回活躍した選手の多くが9月23日に福島で開催される東北・北海道ブロック親善ソフトボール大会に参加します。

（広報室　松尾覚志）

〈山口〉豊浦病院

おむつ交換の出前講座 他施設との交流も

6月19日、当院大会議室で地域の介護施設職員を対象におむつ交換の出前講座を行ない、ケアライフくろい・ベストライフ川棚・ケアライフ綾羅木の3施設から計32人（うち4人は外国人専門職従事者）が参加しました。

嶋野一成副師長の拘縮についての専門的な説明に続いて、おむつ交換の方法を説明。3グループに分かれて実技指導を行なった後は、質疑応答や意見交換の時間となりました。

1時間の出前講座は時間の経過が早く感じられ、当院併設の老健ひびき苑以外の施設経験がない筆者には他施設職員の皆さんとの交流は新鮮でした。また、施設の現状を知るよい機会となり、新たな発見もありました。

（5階東病棟　主任看護補助者　大塚摩弥）

京都済生会病院

院内サマーコンサートで癒やしのひとときを

7月14日、当院の外来エリアでサマーコンサートを開催しました。

開会にあたり、石橋一哉副院長からあいさつと済生会の歴史紹介がありました。

ハンドベル合奏では職員10人が「星に願いを」や「ミッキーマウス・マーチ」などを演奏。三重奏ではピアノを加藤淑子産婦人科顧問、クラリネットを後藤幸子小児科副部長、バイオリンを齋藤敦志耳鼻咽喉科部長が担当し、「アンダー・ザ・シー」や「フレンド・ライク・ミー」などが奏でられました。ゲストによる歌唱は、加藤産婦人科顧問のピアノ伴奏に合わせて「鉄腕アトム」などが披露されました。

来場者も演奏者も、院内に広がる音楽を楽しみ、癒やしのひとときになりました。

（済生記者　白須優也）

載々

済生会の職員が寄稿した記事が、掲載された雑誌等を紹介します

泌尿器科医の視点で機器選びのポイント等を解説

滋賀県病院　泌尿器科　瀧本主任部長

「映像情報メディカル」2024年8月号（産業開発機構）の特集「泌尿器診断・治療の技術革新」に、当院泌尿器科の瀧本啓太主任部長が「泌尿器科医が透視システムに求めるもの」を寄稿した。

当院では20年以上使用してきた透視システムを最新のものに更新し、検査体制を一新した。本記事では泌尿器科医としての経験に基づき、新しい機器を選ぶ際のポイントや、導入後の効果について詳しく解説。医療機器の導入を検討している人にとって貴重な情報が満載されている。

（済生記者　有馬真由美）

大雑報

身の回りで起きた、さまざまなことを楽しく報告するコーナーです。職場の話でも、家庭の話でも、休日の話でも。ご報告ください

ナビちゃんの救出劇

6月のある日。職員の車のボンネットの中から猫の鳴き声が聞こえて中をのぞくと、小さな子猫の姿を発見！　出られなくなってしまった様子で、助けようとしましたが全く動かず……。

そこで、職員の家族で自動車の整備をしている人に来てもらい、一つずつ部品を外してもらいました。1時間ほどの奮闘の末、無事猫を救出!!　けがをして弱っていたのですが、里親を募ったところ一人の看護師が保護してくれることになりました。

その後、動物病院で診察を受け左前足の麻痺と腹壁欠損のヘルニアがあることが判明。治療をしながら少しずつ元気になり、今はぬいぐるみで遊んだり飼い主と一緒に寝たりしているそうです。名前は「ナビ」ちゃんです。

（香川県済生会病院　済生記者　西山汐里）

★もしかして車に隠れていたから「ナビ」ちゃん!?　いや、それを言うならボンネットちゃんか……。

（メディカル・リーフ　富谷咲希）

青森から埼玉へ……驚きと笑顔の再会

「直接ごあいさつに伺いたいのです……青森県から」。5月上旬、電話に出た私は驚きを隠せませんでした。

「え？　青森県の高校の先生がわざわざ埼玉に!?」――電話のお相手は、今年度入職した事務職員、長内咲さんの母校の先生。進路指導担当で、卒業生の就職後の様子をご覧になりたいとのことでした。

6月3日、来院した先生は教え子と再会するや否や「元気そうで安心した」と優しい笑顔に。長内さんは「先生は、進路で悩んでいたとき最後まで一緒に考えてくれた。今楽しく働けているのは、先生のおかげです」と話しました。恩師と再会し、エールをもらった長内さんの眼差しは輝いていました。

長内さん（左から2番目）と母校の先生（同じく4番目）

（埼玉・川口総合病院　人事・総務課　本橋和宏）

★先生・長内さん・川口病院職員の懇談の続きは同院インスタをご覧ください。

（本部広報課　河内淳史）

夏の雰囲気をお届けします

〈東京〉中央病院の患者サービス委員会では、入院患者さんに季節を感じていただく活動として折り紙アートの展示を行なっています。今回の作品は暑い夏に映える「ひまわり」と「花火」に決定。インターネットやYouTubeで折り方を調べ、できるだけ分かりやすい折り方のものを選び、手分けしてとりかかりました。

私は「花火」を担当。鮮やかな色の折り紙を何種類か選んで土台に貼って、上から切り抜いた折り紙を貼ったら完成です！　一気に夏っぽい花火の雰囲気が出ます。

この活動、作る側も楽しんでいるので、患者さんにも喜んでいただけたら一石二鳥ですね。

（東京・中央病院　広報室　佐藤弘恵）

★折り紙に透かしも入っていてきれいですね。季節感が感じられて、患者さんもうれしいでしょう！

（本部広報課　杉山菜央）

看板犬デビューに向けて

〈北海道〉小樽老健はまなすでは、入所・通所の利用者さんや地域の子どもたちが気軽に立ち寄れる、とあるプロジェクトが進んでいます（その内容は後日本誌に掲載したいと思います）。

このプロジェクトの看板犬になるために、7月から週1回訓練（遊び!?）に来ているのが「ゆき」ちゃん（グレート・ピレニーズ／メス／2歳／体重28キロ）。プロジェクトリーダーである本間勝利介護看護長の愛犬です。

訓練の初日は入所者さんのところに行き、「クンクン」とにおいを嗅ぎながらごあいさつ。「かわいい」と大人気で、時には皆の前で寝転び愛嬌を振りまいています。

プロジェクトの完成までに立派な看板犬になれるよう、たくさんの入所者さんや職員と触れ合いながら訓練を進めていく予定です。

（北海道・小樽老健はまなす　済生記者　伝法俊和）

★ダックスを飼う私は「犬は人類の友」と心から思います。ゆきちゃんにも多くの人を癒やしてほしいです。

（メディカル・リーフ　岩谷純一）

ブルーベリージャムの試作品が大好評！

〈北海道〉小樽老健はまなすの福祉農園では、少量ですがブルーベリーをはじめさまざまな農作物を作っています。7月30日には「ブルーベリージャム」を試作し、1・8キログラムのブルーベリーから14瓶相当のジャムができました。

加工販売許可のない施設では販売ができないため、職員や入所・通所の利用者さん、北海道済生会支部におすそ分け。支部はヨーグルトのトッピングに、当施設職員はパンに塗って、利用者さんはおやつのチーズケーキなどにトッピング。「おいしい」と大満足していただけたようです。

当施設の野村信平事務長は「単にソーシャルファームという枠組みの中でのおいしさではなく、無農薬で安心、社会貢献、評判店に負けない味とオリジナリティーを目指していきたい」と、来年度以降の目標を語りました。

（北海道・小樽老健はまなす　済生記者　伝法俊和）

★甘くてすっぱい手作りジャム。何にかけてもおいしそう……想像するだけでよだれが出そうです。

（メディカル・リーフ　坂本陽子）

ここは特等席!?　病室で花火観賞

昭和21年に戦後の復興を祈念して始まり、今年で79回目を迎えた「みなと祭」。境港市民にとっては毎年恒例の夏の祭典です。

7月21日はみなと祭のフィナーレを飾る花火大会。療養病棟に入院中のKさんは花火をとても楽しみにしていました。

花火の打ち上げ場所は当院からとても近く迫力満点で、病室からの眺めは絶景。「特等席でよかったわ」とKさんはうれしそうです。30分間ほど、Kさんはベッドの上から花火を楽しみました。

後日、病棟スタッフが花火を眺めるKさんの写真を貼り合わせて写真立てを作りました。今日もKさんは、花火の写真を眺めています。

（鳥取・境港総合病院　済生記者　亀尾美子）

★夜空と山々をバックに鮮やかな彩りが映えて、まさに特等席!!　Kさん、どんな思い出が蘇ったのでしょう。

（メディカル・リーフ　富谷咲希）

記念すべき「済生」初掲載

今年度から済生記者に任命され、本誌への寄稿を始めました。

毎月たくさんの寄稿がある中「本当に載るのだろうか……」という不安もありましたが、8月号に「プール開き」の記事が無事掲載されているのを発見!!

初掲載の記念すべき「済生」は、取材に協力してもらった保育士へ、手作りのメッセージカードとともにプレゼント。満面の笑みで受け取ってもらい、私にとっても大変な励みとなりました。

私の書いた記事が掲載されることで、職員のモチベーションアップに

8月号にプール開きの記事で取材に協力してくれた保育士。済生記者からのお礼のメッセージカードと、本人が載った「済生」を手にしています

次号予告

済　生　No.1144［令和6年10月号］

済生会の不易流行論（193）　炭谷　茂
NEWSな済生人
済生会交差点
この人　中村　蒼
口福にっぽん（85）　いきなり団子（熊本県）
てづくりおもちゃ　いまいみさ

広告索引

（株）日立システムズ ――― 表紙見返し［表紙2］
大樹生命保険（株） ――― 裏表紙［表紙4］

今シリーズでは、犬飼先生の消化器外科医として、また現在のがん診療に携わる内科医としてのご経験に基づき、
栄養管理の基本的かつ総合的な情報を提供していただきます。質疑応答の時間も設けています。
どなたでも参加でき申し込みも不要。多数の方の参加をお待ちしています。

★参加費無料。職員以外の方も参加できます。 ★zoom（WEB会議システム）を使用したセミナーです。
※多くの施設ではzoomの利用環境が用意されています。参加希望でzoomに不慣れな職員は、所属施設にご相談ください。

プログラム／スケジュール／アクセス

第1回「病棟での管理栄養士に期待すること（グリム基準を含む）」
8月15日（木）好評のうちに終了しました

第2回「輸液と経腸栄養剤」
9月25日（水）18:30～19:45（講演1時間＋質疑応答15分）
https://zoom.us/j/95895847160?pwd=lri0wjYvH6rjaNyeGl76CGk6RGb9ll.1
ミーティングID：958 9584 7160
パスコード　：831192

第3回「がんの栄養管理」
10月17日（木）18:30～19:45（講演1時間＋質疑応答15分）
https://zoom.us/j/94098111906?pwd=HFgbh1X2ucxsbzWFJa26hiacADUGon.1
ミーティングID：940 9811 1906
パスコード　：241017

講師紹介　岡山済生会総合病院　内科・がん化学療法センター主任医長　**犬飼道雄**医師

胃癌・大腸癌・食道癌といった消化器癌や胆膵癌・原発不明癌、悪性リンパ腫や肉腫など幅広い領域の化学療法や放射線化学療法を外科・内科・放射線科等と協力し行なっておられます。また臨床栄養は外科医であったころから取り組まれ、現在は化学療法を行なう中で、支持療法として栄養療法を積極的に取り入れていらっしゃいます。かかりつけの先生方と岡山済生会総合病院のメディカルスタッフが協力し、がん自宅死亡割合は40％を超えているとのことです。

主催：**全国済生会栄養士・管理栄養士会**

問い合わせ窓口：神奈川県済生会横浜市東部病院　栄養部　工藤雄洋
TEL：045-576-3000　E-mail：t_kudo@tobu.saiseikai.or.jp

つながればうれしいです。
（埼玉・川口乳児院　済生記者　大貫典子）

★ご寄稿ありがとうございます！喜んでもらえて編集部一同もうれしいです。今後もどしどしお待ちしております。（本部広報課　杉山菜央）

「そよかぜ」の皆さんが活躍

〈静岡〉特養小鹿苑ではボランティアグループ「そよかぜ」の10人のボランティアさんが月2回、利用者さんの衣類の名札付けやウエス作り等の繕い物活動をしてくださっています。その活動歴はなんと30年以上！

特に、大きな洗濯機で洗濯をする利用者さんの衣類は、皆さんの丁寧な名札付けのおかげで、間違えずに本人の元に返すことができています。

静岡市には元気高齢者を応援する「元気いきいき！　シニアサポーター事業」があります。指定活動先で地域貢献活動を行なうとポイントがたまり市の地場産品と交換できる仕組みで、当苑も指定活動先として登録中。「そよかぜ」のボランティアさんもシニアサポーターとして活躍しています。
（静岡・特養小鹿苑　済生記者　本間佐知子）

★ボランティア活動に参加し、そのポイントで市の地場産品と交換できるなんて……いいですね！
（本部広報課　大嶋　薫）

アンケートにご協力ください

機関誌「済生」をご覧いただきありがとうございます。本誌に対する満足度やニーズを把握するため読者アンケートを実施しています。二次元バーコードからご回答をよろしくお願します。皆さまからのご意見を参考にして「済生」を編集してまいります。
（編集部一同）

済生会

明治44年2月11日、明治天皇は、時の総理大臣桂太郎を召されて「恵まれない人々のために施薬救療による済生の道を広めるように」との済生勅語に添えてお手元金150万円を下賜された。桂総理はこの御下賜金を基金として全国の官民から寄付金を募って同年5月30日恩賜財団済生会を創立した。

以来今日まで113年、社会経済情勢の変化に伴い、存廃の窮地を乗り越えるなど幾多の変遷を経ながらも、本会は「施薬救療」という創立の精神を理念とし保健・医療・福祉の充実・発展に必要な諸事業に取り組んできた。

戦後、昭和26年に公的医療機関の指定、同27年に社会福祉法人の認可を受け、現在、社会福祉法人恩賜財団済生会となっている。

総裁　秋篠宮皇嗣殿下
会長　潮谷義子
理事長　炭谷　茂
本部＝東京　支部＝40都道府県
病院　83
診療所　20
介護医療院　2
介護老人保健施設　28
救護施設　1
児童福祉施設　25
老人福祉施設　119
障害者福祉施設　9
看護師養成施設　7
訪問看護ステーション　66
地域包括支援センター　31
地域生活定着支援センター　5
その他　9
合計　405（数字は令和5年度）

さらに巡回診療船「済生丸」が瀬戸内海の58島の診療活動に携わっている。

職員数は全国で約6万6000人。

済　生［令和6年9月号］
THE NEWSLETTER of Social Welfare Organization Saiseikai Imperial Gift Foundation, Inc.

令和6年9月10日発行
通巻第1143号（第100巻第9号）
編集兼発行人　炭谷　茂
発行所　社会福祉法人恩賜財団済生会
〒108-0073
東京都港区三田1-4-28
三田国際ビルヂング21階
TEL：03-3454-3311（代）
FAX：03-3454-5576
印刷所　株式会社白橋
東京都中央区八丁堀4-4-1

©社会福祉法人恩賜財団済生会

済生会 THE NEWSLETTER of Social Welfare Organization | 第1143号 | 令和6年(2024年)9月10日発行(毎月1回・10日発行) | 社会福祉法人恩賜済生会

＼済生会 新しい医療保険制度／

メディカル・セレクト

〈無配当医療保障保険(団体型)〉

新制度のご案内

基本的な保障に加えて、オプション保障プランを選択できるようになりました!!

総合医療あんしんプラン

- 入院給付金
- 手術給付金
- 放射線治療給付金

制度変更 →

New メディカル・セレクト
[2025年1月より]

基本プラン
- 入院給付金
- 手術給付金*

⊕ガン・女性疾病入院保障プラン
⊕入院初期給付一時金保障プラン

ここが追加!

*所定の放射線治療は手術給付金の支払対象

＼制度リニューアルに伴い、／
全員手続きをお願いいたします。

「総合医療あんしんプラン」のご加入者さまには、
各施設の共済担当者より移行手続き書類を配布いたします。
ご加入者さまは全員、パンフレットに記載の移行手続き方法に沿って、
手続きをお願いいたします。

Check! 「メディカル・セレクト」のご案内が動画でご覧いただけます。

●メディカル・セレクト(新制度)の詳細は、パンフレットをご確認ください。

移行手続き締切日 2024年9月20日(金)

保険期間：2025年1月1日～2025年12月31日
責任開始期(加入日)：2025年1月1日

保障内容に関するお問い合わせ先

〈大樹生命 公共・広域法人営業部〉
☎ 03-6831-8843
受付時間 9:00-17:00(平日)

保険契約者：社会福祉法人恩賜財団 済生会
引受保険会社：大樹生命保険株式会社

大樹-KB-2024-346

ISSN 1343-571X

P-B10139
グリーン・プリンティング
この印刷製品は、環境に配慮した資材と工場で製造されています。